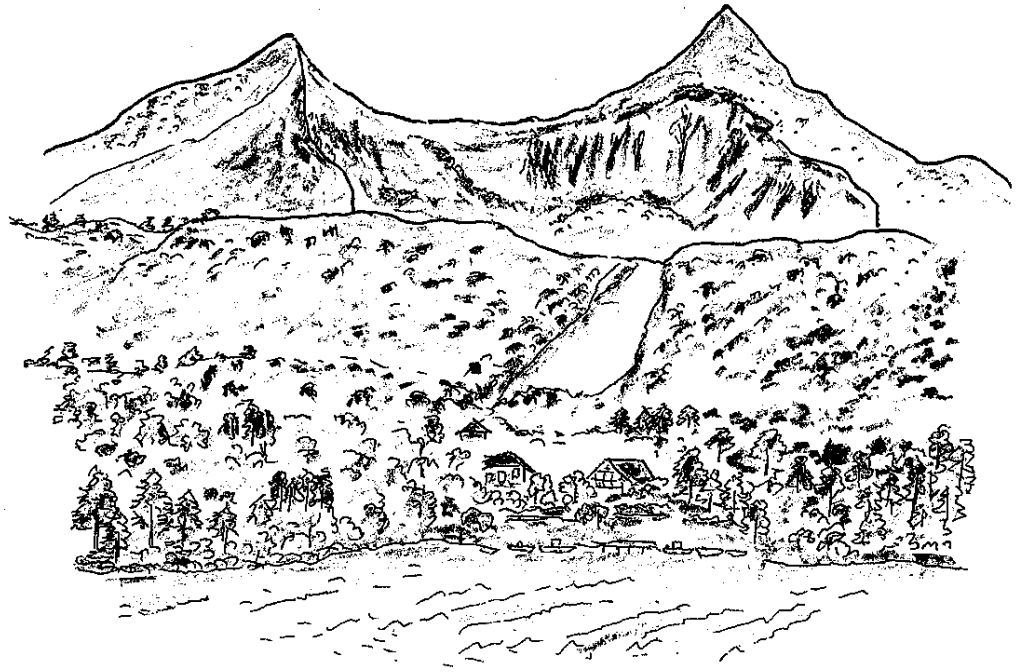
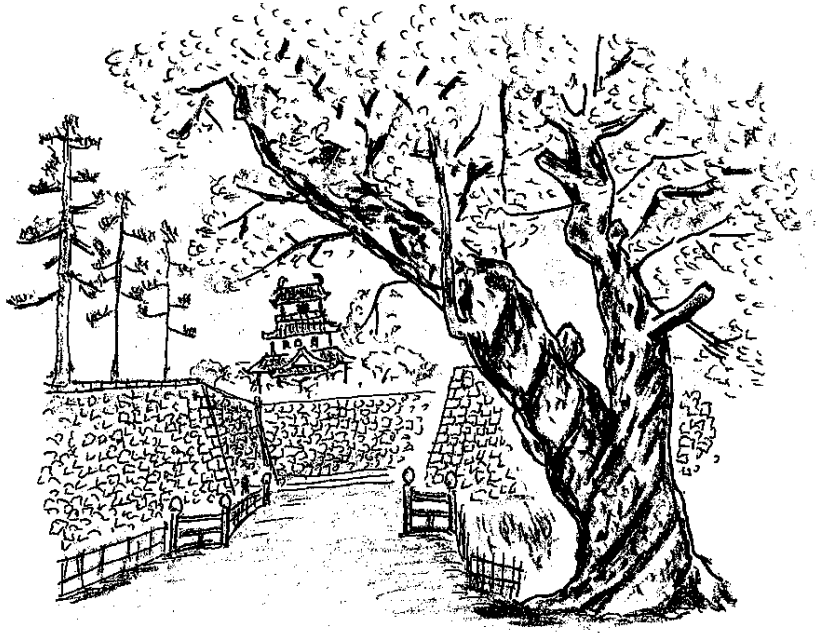
復興の礎

遠藤現夢十次郎と立ち上がった人々





ー先人に学ぼうー
語り継ぎたい ふるさとの話 第7集

作・画 惣山太郎

讃

― 鮮烈な魂の持ち主たち ―

長谷川　慶一郎

惣山太郎氏は、「語り継ぎたいふるさとの話」というテーマで、第七集目の作品に取り組んで見せた。

第七集の主人公遠藤十次郎（遠藤現夢）は、元治元年一八六四）会津若松に誕生し、長じて鶴ケ城や市内の各地にソメイヨシノを植樹し、「さくらの街」会津若松の礎を築いた人物である。

また同時に、火山爆発で荒廃していた磐梯山の周辺を開発して、アカマツを主体として植樹し、裏磐梯国立公園と呼ばれている国際的な名勝地の構築に大きな力を発揮している。

二つの大きな事業には、しっかりした協力者が付いている。会津若松市内の桜の植樹には、松平家が十次郎の発想に理解を示し、磐梯山麓の植樹事業に関しては、宮森太左衛門・齋藤丹之丞・中村弥六等の献身的な力添えを得ている。

惣山太郎氏の調査により、遠藤十次郎は高遠衆（たかとおしゅう）の末裔であることが判明した。保科正之が徳川家康に転封を命じられた時、正之に伴って高遠を出、最上（もがみ）を経由して会津に来たものと思われる。高遠は、長野県伊那市高遠町と呼ばれていて、低山地に形成された小さな町である。中世に於いては、武田信玄の領地であった。

高遠衆という人種は、何事にもひた向きに立ち向かう鮮烈な魂を保有している。

それは何故か。その原点は、天正十年（一五八九）に遡る。天正十年三月二日、高遠城は織田信長の嫡男信忠の軍勢五万人の襲撃を受けた。その時、高遠城を守っていたのは、武田信玄の五男・仁科五郎盛信であった。武田信玄は既に亡く、武田家の当主は四男・勝頼であった。仁科五郎盛信は、五万の軍勢に囲まれて、武田の滅亡を感じ取った。三千人の人々と共に、高遠城に籠城して壮烈な戦い方をして見せ、武田武士の名を後世に残す作戦に出たのである。その行動は、全国の武士たちに大きな影響を与えたと思っている。

伊達政宗が会津に攻め込んできた時、葦名の名を残すために、少人数で伊達軍に切り込みをかけ、敵陣中で自刃して見せた金上盛備（もりはる）などはその典型であろう。

会津戊辰戦争の折、女性や子供までも自刃して見せた行動は、高遠城落城の光景と酷似している。

仁科五郎盛信は、高遠町の小高い山の頂上に埋葬され、今では彼の石像が高遠の街を眼下に納め見守っている。四百年以上の日月が経過しているのだが、彼は今でも高遠の人々の誇りであり尊敬の対象になっている。

磐梯山裾野に植林をした時、十次郎に専門的な知識を提供した「日本林業の祖」と呼ばれた中村弥六も高遠衆なのである。五色沼湖畔に建てた小屋に十次郎と起居を共にし、植林事業を成功に導いている。

十次郎にも中村弥六にも、高遠城で戦死した仁科五郎盛信たち高遠衆の鮮烈な魂の香りを感ずることが出来る。

心が洗われるような話題を、久々に提供してくれた作者に感謝したい。

惣山太郎氏、ありがとう。

二〇二一・四

目次

この本で登場していただいた人々 …… 6
主な出来事の年表 …… 7
第一部　戊辰戦争 …… 11
会津藩の降伏 …… 15
会津三方道路と会津自由党 …… 17
剣術の奥義を極める …… 19
第二部　磐梯山の大爆発 …… 20
木村昌平翁 …… 21
写真屋　岩田善平 …… 23
湯守の白井徳次 …… 23
鶴ヶ城跡地の入札と遠藤敬止 …… 25
遠藤十次郎となる …… 26
このころの世の動き …… 28
運送会社を創業 …… 29
全国演武大会 …… 30
鶴ヶ城跡地の管理者となる …… 32
城跡の整備事業 …… 34
裏磐梯を訪ねる …… 38
矢部長吉の取り組みと発電事業 …… 39
渋沢栄一　会津に来る …… 40
城跡に桜を植える …… 41
いよいよ裏磐梯へ …… 43
矢部長吉の植林 …… 43
矢部善四郎から権利を譲り受ける …… 45
白井徳次の植林 …… 46
中村弥六博士との出会い …… 49
齋藤丹之丞を雇い入れる …… 50
松平家と小作契約を結ぶ …… 54
官有地払下げ許可願 …… 55
総理大臣（原敬）の配慮 …… 58
「裏磐梯」と命名する …… 59
自分の墓石はこれだ …… 60
「弥六沼」と名づける …… 62
鶴ヶ城跡地を会津若松市へ …… 63
「磐梯施業森林組合」の設立 …… 64
温泉保養施設を目ざして …… 66
温泉引湯事業の挫折 …… 69
十次郎失意の果て …… 71
書き終えて …… 76

発刊の思い

コロナ禍の中ですが、大勢の花見客が鶴ヶ城の桜を愛でています。そして、雪解けの裏磐梯の探勝に各地から訪れています。郷土の先人たちはこのコロナ禍をどのように見ているでしょう。また、後世の人たちはどのように振り返ることでしょう。

現世を生きる者の一人として、後の世代に語り継いでおきたいことをまとめてみたいという思いから、著述家でもなく、歴史研究家でもないながら、前作では《この水を求めて「掘抜き堰の開削」》として、先人の努力のおかけで今日があるということを書きました。

今回取り上げたのは〝復興の礎〟として戊辰戦争で荒廃した会津若松の鶴ヶ城跡地の復興と、磐梯山の爆発で荒廃地となった裏磐梯の復興に尽力された人々の中でも、特に両方に携わったと言われる『遠藤現夢十次郎』を中心としてまとめてみました。

私自身、単純で、クイズの答え程度にしか知らずに、長年地元の小学校で子どもたちに関わり、また、これまた長年、裏磐梯のパークボランティアとして探勝者に接してきたことに深い反省をこめての懺悔とでもいった思いから、先人たちのすばらしい業績を語り継ぐ材料の一つにでもなればと考え、取り組んだ次第です。

二つの復興の事業に取り組んだ、遠藤十次郎について調べるにあたって、関係市町村史をはじめ、これまでにまとめられた諸先輩のご著作や、関係団体、報道機関や県等の出版物を参考にさせていただきました。

読み物風にとりまとめたいと考え、個人的な想像や創作を一部取り交ぜ、また、登場人物の顔やセリフを創作して稚拙なイラスト入りの読み物にしました。

さらに、二つの事業を第一部、第二部としましたが、時期的に重なって進行しているため、時系列で物語を進め、鶴ヶ城と裏磐梯と場面を移動させて表現しました。

終わりに、繰り返しますが、郷土史研究家でもなく、文筆家でもありませんので、不備な点が多々あるかと思います。ご批正をお願いする次第です。

令和三年四月

惣山太郎（加藤　紘一）

この本で登場していただいた人々

鶴ヶ城跡の復興

遠藤　十次郎　（若松）……
滝口　太右衛門　（十次郎の父）
滝口　ミヨ　（十次郎の母）
遠藤　イク　（十次郎の妻・大和屋）
遠藤　喜助　（十次郎の義弟・イクの弟）
遠藤　義之助　（十次郎の長男）
遠藤　よね　（十次郎の二女）
小林　栄助　（よねの夫）
佐瀬を継ぐ……
清水　粂太　（会津藩士）
小沢　次郎　（会津藩士）
三島　通庸　（福島県令）
※宇田　成一　（会津自由党）
※中島　友八　（会津自由党）
※赤城　平六　（会津自由党）
※原　利八　（会津自由党）
※三浦　文治　（会津自由党）
※河野　廣中　（自由民権運動）
遠藤　敬止　（七十七銀行の頭取）
松平　容大　（松平家第十一代）
※秋山　清八　（初代会津若松市長）
原　敬　（総理大臣）……
間瀬氏　（松平家の管理人）
深田　錠八　（松平家の管理人）

裏磐梯の復興

木村　昌平　（喜多方・宇津野）
岩田　善平　（喜多方・写真館）
白井　徳次　（塩川・湯守）
白井　徳八　（徳次の長男）
佐藤　栄二郎　（雄子沢）
瓜生　岩子　（喜多方・熱塩加納）
矢部　長吉　（喜多方・酒造業）
矢部　善四郎　（長吉の長男）
渋沢　栄一　（実業家）
葛岡　庄太郎　（十次郎の甥）
松本　時正　（十次郎の同志）
宮森　太左衛門　（十次郎の同志）
戸田　惣左衛門　（十次郎の同志）
斎藤　丹之丞　（人夫頭）
斎藤　トメ　（丹之丞の妻）
中村　弥六　（林学博士）
小椋　寅次郎　（長峯集落）
佐藤　フク　（長峯集落）
田中　智学　（慰霊碑の揮毫）
鈴木　寧子　（十次郎のひ孫）
佐伯、長井、勝俣、吉田　（同志）
※田島　慶三　（会津若松商工会議所）

※は時代背景の中で名前が出てきます

出来事の年表

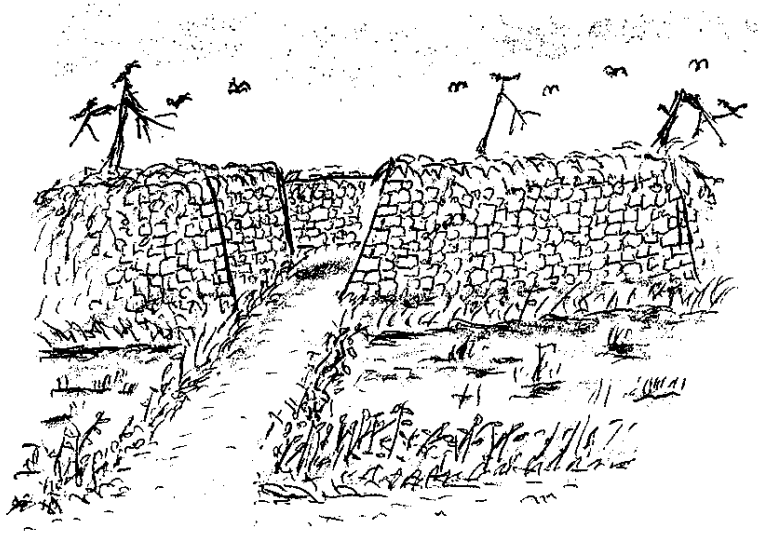
西暦	和暦	物語に関すること	世の中のできごと
一八六四	元治一	一月十日　十二郎出生	二月　松平容保、御宸翰を天皇より受ける 六月　新選組　池田屋事件
一八六八	明治一	八月　戊辰戦争　会津攻撃 九月　降伏・開城	加波山事件
一八七一	明治四	鶴ヶ城の櫓と塀とりこわし	秋元湖洪水
一八七四	明治七	十二郎(十歳)真一刀流入門修行	小野川湖洪水
一八七六	明治九	鶴ヶ城内の建物とりこわし	桧原湖満水
一八八二	明治十五	喜多方事件　三島県令着任　十次郎(十八歳)	五月十九日　吾妻山噴火
一八八四	明治十七	十月　三方道路開通式	
一八八五	明治十八	十次郎(二十一歳)剣術の奥義を究める	七月二十五日　日清戦争始まる
一八八八	明治二一	七月十五日　磐梯山爆発　日赤活動　秋元湖洪水	四月　会津若松市制を施行 初代市長・秋山清八
一八九〇	明治二三	白井徳次、温泉復興に立ち上がる 遠藤十次郎となる	山川健次郎、東京帝大総長就任
一八九三	明治二六	鶴ヶ城跡地を遠藤敬止が落札	
一八九四	明治二七	十次郎の長男・義之助出生	二月　日露戦争始まる
一八九五	明治二八	十次郎(三十一歳)十一月二日　妻・イク病没	
一八九九	明治三二	七月　岩越鉄道(郡山―若松)開通	九月　日露戦争終る
一九〇一	明治三四	十一月　北山水力発電所設立(矢部長吉)	
一九〇二	明治三五	十次郎、全国演武道大会優勝(これより十九年連続)	
一九〇三	明治三六	一月　東山水力発電所開業 矢部長吉、植林の許可を受ける	
一九〇四	明治三七	一月　岩越鉄道(若松―喜多方)開通 十月　新道(若松―田島)開通	
一九〇五	明治三八	十次郎(三十七歳)運送業創業 十次郎　鶴ヶ城跡地の管理者となる 運送会社を義弟に譲る みそ・しょう油業にもどりつつ、城跡の整備・植林をする 御廟のスギ植樹　見祢山のスギ植樹	加納鉱山発電所設置 ロシアから南樺太を受領
一九〇六	明治三九	十次郎　松平家より手水鉢一対をいただく	

一九〇七	明治四十	十次郎(四十三歳) 義之助 (十四歳) をつれて裏磐梯へ	蓮沼門三が修養団発会式
		桧原川の発電事業の下見調査	若松市に歩兵連隊確定
		矢部善四郎と出会う	
一九〇八	明治四一	陸軍六十五連隊営門前に桜の植樹	沼尻鉱山開業
		栄町通り他に桜を植樹	初のブラジル移民
		河川法に抵触し桜の抜取り始末	
一九一〇	明治四三	十次郎(四十六歳) 矢部善四郎から払い下げの権利を譲り受ける	日韓併合
	明治四四	白井徳次没 (六十七歳)	猪苗代水力電気㈱設立
一九一二	明治四五		タイタニック号沈没
	大正一	矢部長吉没 (六十七歳)	耶麻軌道開通式
一九一四	大正三	二月 県に植樹許可申請	日本はドイツに宣戦布告
一九一七	大正六	二月九日 松平家と小作契約	会津各地で米騒動
		三月二日 県から植樹許可を得	
		斎藤丹之丞を雇う	
		「紅柳館」を作る	
		苗木運搬道路を作る	
		中村弥六博士と出会う	
一九一九	大正八	「植林成功届」「官地払下許可願」提出	
		総理大臣 (原敬) より賞辞を受ける	
一九二〇	大正九	鶴ヶ城跡地を会津若松市に引き渡す	株式大暴落
		「磐梯施業森林組合」設立	
		自然公園化を目ざす 道路整備	
		「温泉保養施設」建設の官地拝借願提出	
一九二二	大正十一		野岩羽線 (今市―田島間、米沢―喜多方間) 予定路線となる
一九二三	大正十二		関東大震災
一九二六	大正十五		会津若松―坂下間 開通
一九二八	昭和三		熊倉水力電気㈱設立
一九二九	昭和四	矢部善四郎没 (六十一歳)	満州事変
一九三一	昭和六		二・二六事件
一九三四	昭和九	「鶴ヶ城公園」と命名される	日中戦争
一九三五	昭和十	十二月六日 十次郎没 (七十三歳)	
一九三八	昭和十三	八月 日中線開通	
一九四一	昭和十六		ハワイ真珠湾攻撃
一九四五	昭和二十		第二次世界大戦 終戦
一九五〇	昭和二五	九月五日 「磐梯朝日国立公園」に指定される	
二〇二〇	令和二	九月五日 国立公園指定七十周年記念式典	

第一部

戊辰戦争（明治元年）

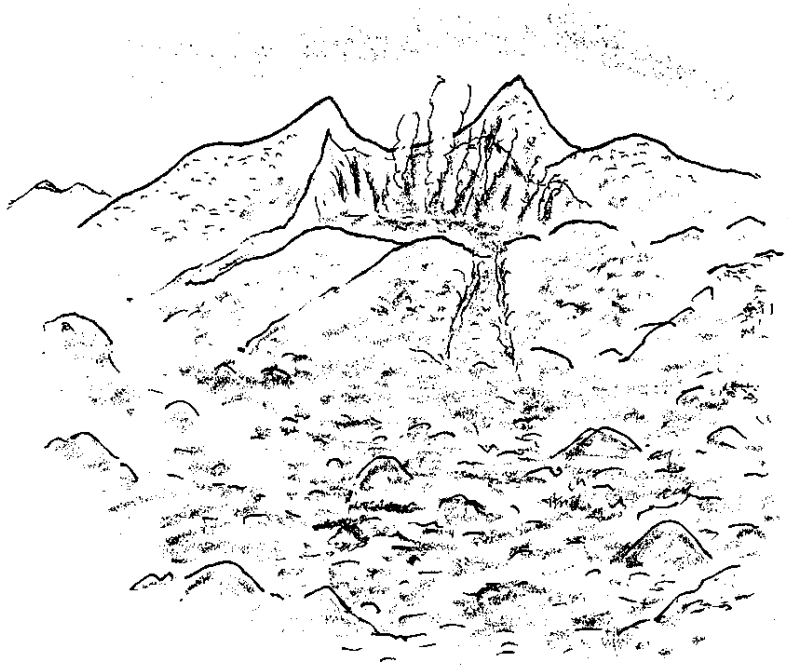
敗れたあと　廃墟となった
鶴ヶ城跡に　桜花を！



第二部

磐梯山大爆発（明治二十一年）

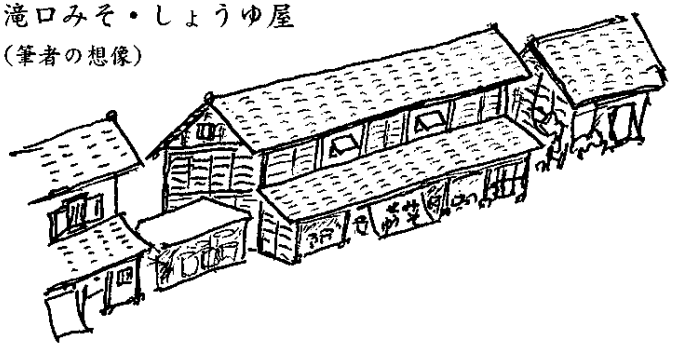
岩と火山砂の荒野となった
裏磐梯に　緑を！



復興のため
私財をつぎこみ
命をかけて取り組んだ
人々がいた

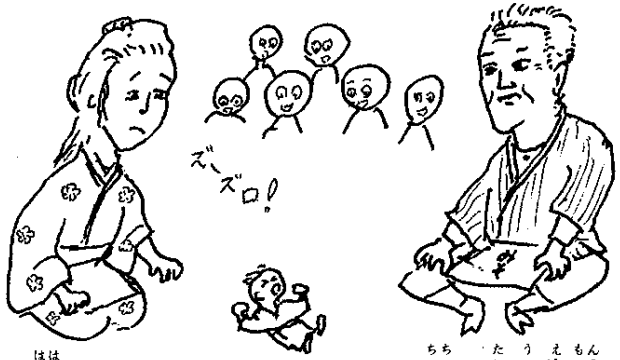
滝口みそ・しょうゆ屋

（筆者の想像）



遠藤現夢は、
元治元年（一八六四）一月十日
会津若松新横町（※）の、みそ・
しょうゆ屋、滝口太右衛門の
十二男として生まれた。
幼名は十二郎
滝口の初代太右衛門は、信州
高遠より保科正之に随って
寛永二十年に西名古屋町に
移り住んだ。

（佐瀬氏資料の家系図より）



母・ミヨ　　父・太右衛門

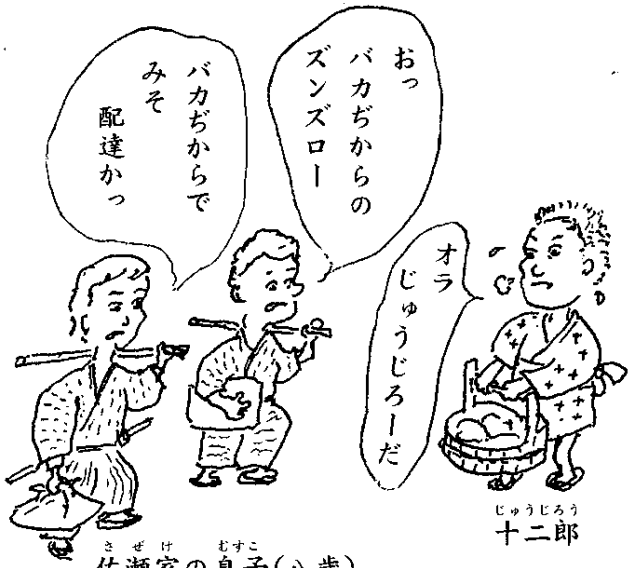
※現在の本町コープ付近にあった。（佐瀬氏による）

十二郎が四歳のとき
戊辰戦争が始まった。

会津の町中は
不穏な中だったが
十二郎はスクスクと
育った。

戊辰戦争…慶応四年の戊辰の年に、鳥羽・伏見の戦いで始まった。
薩摩藩・長州藩・土佐藩を中心とする新政府軍と旧幕府軍との内戦で
会津藩は旧幕府軍だった。

十二郎が六歳のとき（一八七〇年）



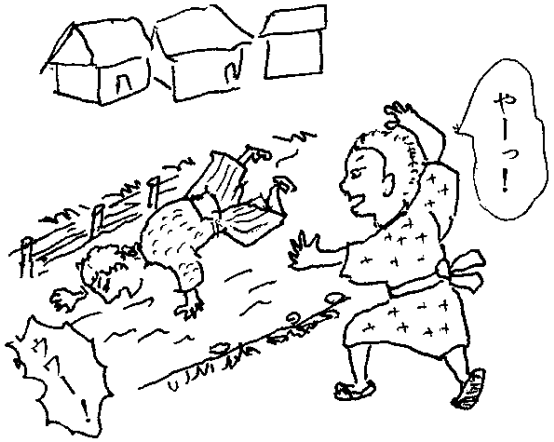
十二郎

佐瀬家の息子（八歳）

（筆者の想像）

十二郎は、母の口まねをしてからかわれがまんできずにとびかかっていった。

年上の佐瀬を堀（外堀）に投げこんだ。



佐瀬家の息子は
刀ももたずに
びしょぬれで帰った

十二郎は
家に帰ると

佐瀬家では…

佐瀬は
滝口みそ・しょうゆ屋に乗りこむと

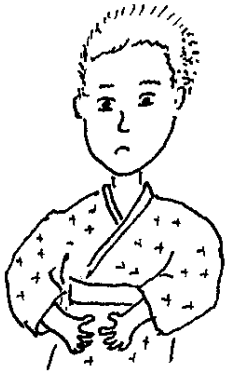
三忠碑…天正十七年に起った猪苗代の磨上原の戦いにおいて、伊達政宗から芦名の殿様の危急を救った三人の忠臣をたたえる碑。

十二郎は、
佐瀬家の養子となった

佐瀬の家は武士の家柄だ
バカカだけではだめだ
剣術と学問をしっかりやれ！

時は、まさに
戊辰戦争の只中
戦火が会津の城下に迫った

武士である佐瀬家の当主はもちろん
家族や奉公人も出陣し、戦死したり
待てども帰ってくる様子もなく
家人は離散してしまった。
火の手は武家屋敷にも迫り
一人ぼっちの十二郎は
どうすることもできず
滝口の実家に
もどった。



滝口みそ・しょうゆ屋

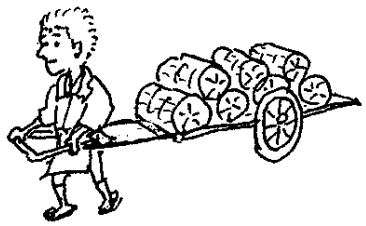
兄たちと
いっしょに
みそ・しょうゆ
づくりをして
成長した。

暮しが楽でない滝口家では、一人分の食いぶちでも大変だった。

縁があって十二郎は、大町の米屋『大和屋』へ養子に出された。

『大和屋』は『遠藤』の姓で『遠藤十二郎』となった。

腕力の強い十二郎は米屋の仕事はお手のものでせっせとよく働いた。



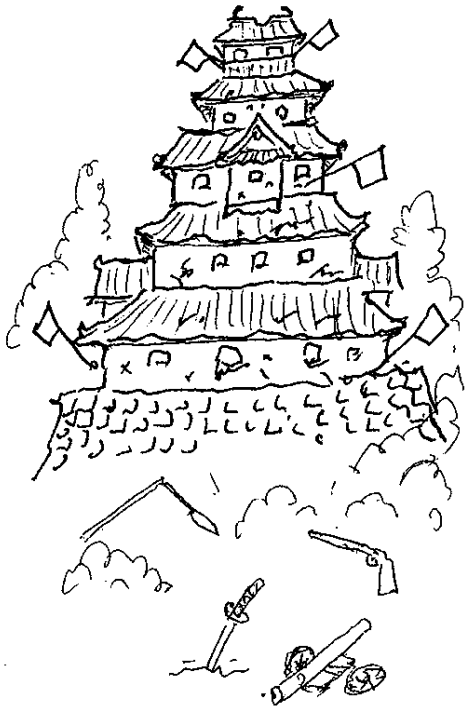
慶応四年（一八六八）九月八日

明治天皇

明治天皇が即位し、

と

元号が改められた。



九月二十二日

会津藩は降伏し、鶴ケ城を開城した。

明治四年（一八七一）七月

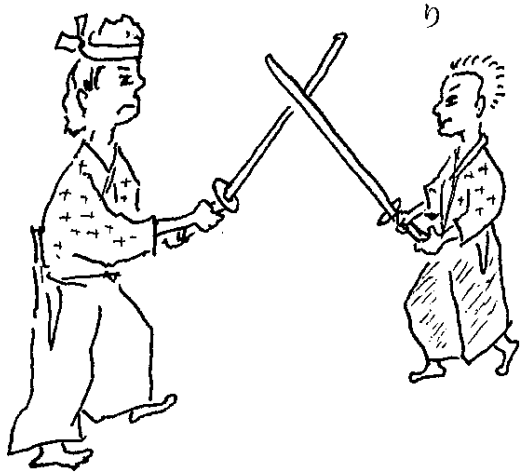
北出丸の東西両角櫓と塀の

とりこわしが始まった。

明治七年（一八七四）

十二郎は

十歳になり



旧会津藩士

清水粂太

小沢次郎につき

真一刀流の

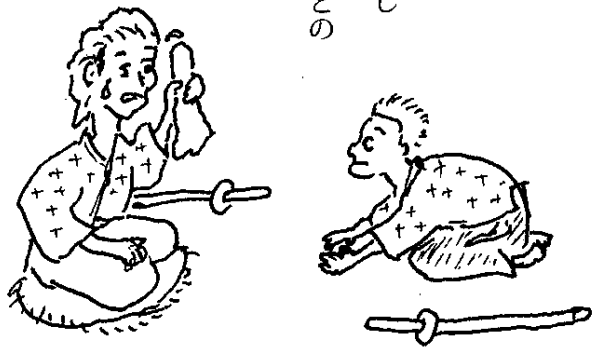
剣術修業を始めた。

十二郎は

めきめき上達し

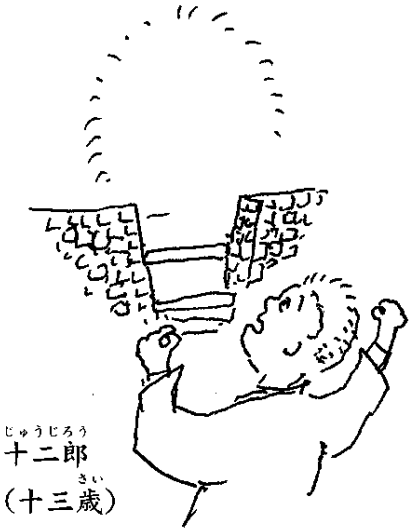
師範も驚くほどの

腕前となった。



明治九年（一八七六）
鶴ケ城は博覧会の後、天守閣・角櫓・城門
そしてすべての建物が七日までに姿を消した。
博覧会は、消えてゆく城に別れを告げる
一般住民でにぎわった。

ちなみにこの年は…
・山本八重子は新島襄と結婚
・山川健次郎は東京開成学校教授補となる
・野口英世が生まれる



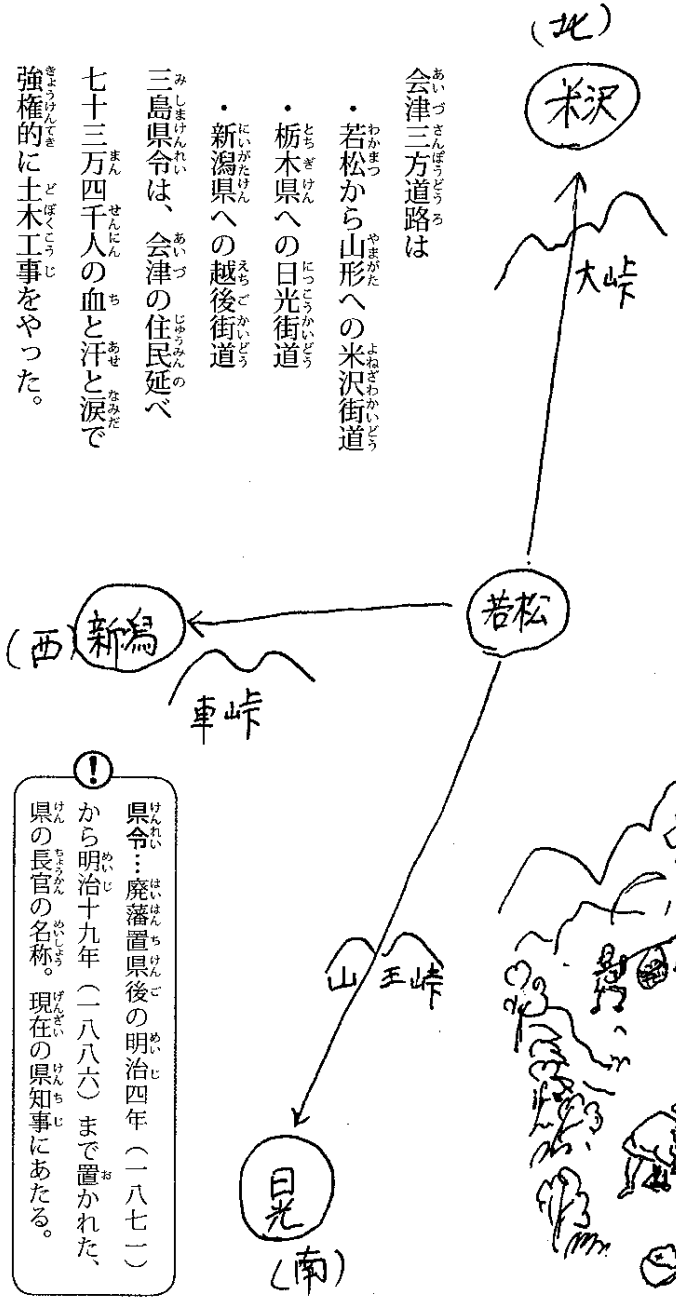
十二郎
（十三歳）

明治十五年（一八八二）
十二郎、十八歳のとき

福島県令　三島通庸

福島県令の三島通庸が
会津三方道路をつくるため
会津の人民に
過酷な条件で
出役・労働を
強制した。

会津三方道路は
・若松から山形への米沢街道
・栃木県への日光街道
・新潟県への越後街道
三島県令は、会津の住民延べ
七十三万四千人の血と汗と涙で
強権的に土木工事をやった。



県令…廃藩置県後の明治四年（一八七一）から明治十九年（一八八六）まで置かれた、県の長官の名称。現在の県知事にあたる。

会津自由党は、農民とともに
三島県政に対する反対闘争を展開し、
明治十五年（一八八二）に喜多方事件を起こした。
千人以上が捕えられた。

自由民権運動

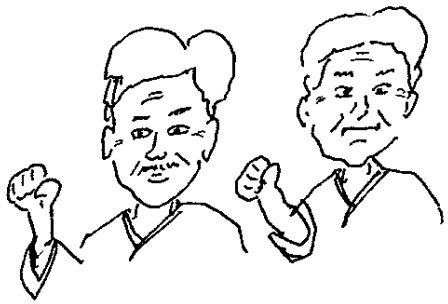
河野廣中
（三春出身）

《会津の自由民権運動の志士たち》

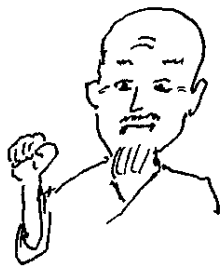
原　利八

赤城平六

三浦文治　佐治幸平



宇田成一



中島友八

三方道路工事には、
十二郎も駆り出された。

十二郎（十八歳）

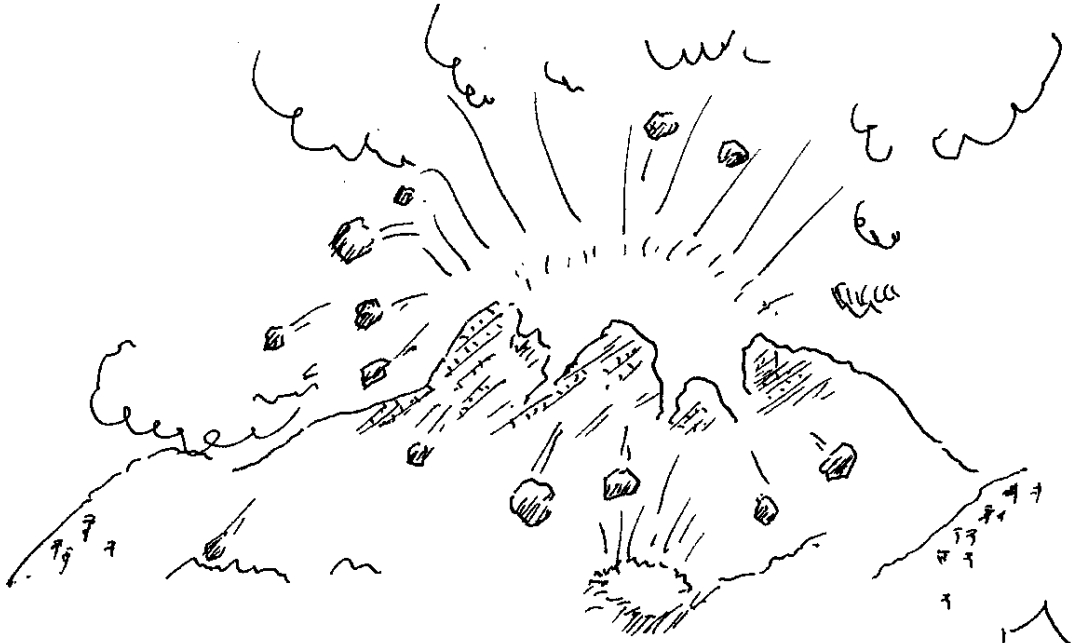
十五歳〜六十歳の男女は
毎月一日の義務で
二年間の労役を課せられた。
三島県令は、民意を聞かず
三方道路のコースもかってに決めて
田畑の土地もおかまいなく召し上げ
人民を酷使した。
その結果、
明治十七年（一八八四）十月二十七日
三方道路の開通式が行われ、
馬車が通れるようになった。
この年、茨城県の加波山で三島県令に反対する
自由民権派の運動家十六名が加波山事件を起こし、
三浦文治らが中心となり捕えられた。

明治十八年（一八八五）
十二郎、二十一歳。
十歳の時から習い始めた剣術の
上達の早さは抜群で

一刀流の奥義だけでなく
二刀流の奥義も極めた。

十二郎の母親のミヨは身体が弱かった。
親を思う心は幼少より深く
十三年間という長い間
母親の病床でよく看病した。
「会津剣道誌」には
―十二郎の
孝心の深いこと
世の亀鑑であった―
とある。
※亀鑑…かがみ、手本のこと。

明治二十一年七月十五日とんでもないことが起きた！



磐梯山が大爆発

小磐梯の崩壊により
山体を造っていた岩塊や土砂は
北側に流れ下り
三つの村を埋め
死者四七七名の大惨事となった。
泥流はふもとの川を堰き止め
桧原湖、秋元湖、小野川湖
などの堰き止め湖と
大小三百あまりの沼や
平原などを出現させ
爆発前の自然の姿とは
全くちがった荒蕪地に
変えてしまった。

被災した家の数は
細野（五戸）　雄子沢（十三戸）　秋元（九戸）
小野川（十一戸）　早稲沢（十戸）
檜原（五十二戸）

（「木村昌平の磐梯山噴火見聞略史」より）

噴火の翌日（七日十六日）
現地を確認に行った人がいる！

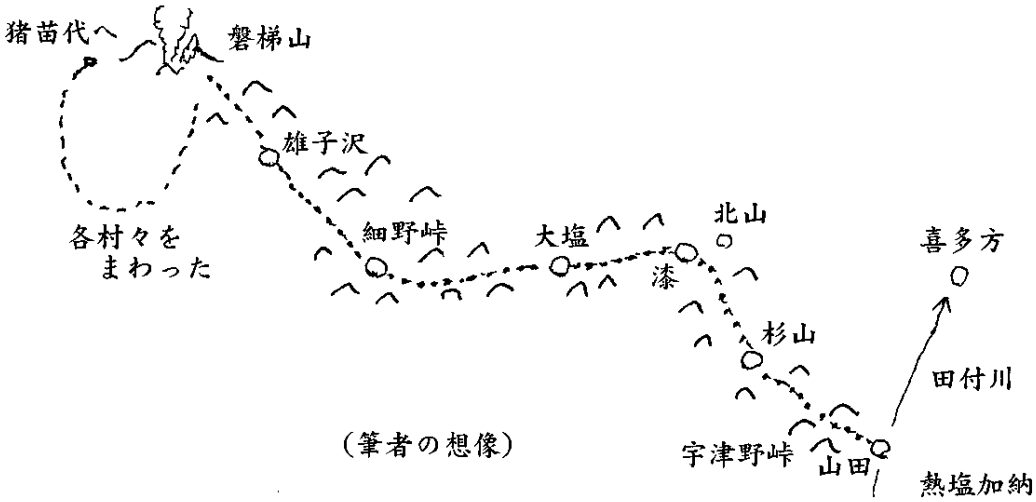
木村昌平（六十七歳）
耶麻郡山田村（※）
肝煎（村長）
探究心の旺盛な人であり、
個人的に一人ででかけた。

※現在の喜多方市熱塩加納町山田

（筆者の想像図）

矢立（筆）
紙・手帳
食料、火打石
ろうそく
熊の胆（薬）
小袖のすそをまくり、ももひき・足袋・脚絆・
手甲・すげ笠・わらじばき

（遠藤仁著「木村昌平の磐梯山噴火見聞略史」より）



（筆者の想像）

山田村を出発し、宇津野峠から杉山に出て、漆を通り、大塩から旧米沢街道を登って峠をこえ……

木村昌平翁は、何よりも世のため、人のために尽くし学び舎を設立し、後継者の教育に努めると共に、蚕種の研究など、殖産興業に一生を捧げた人でもあった。

噴火で被災した村々を、自分の足と目で歩き回りスケッチと、状況を細かくメモし、『磐梯山噴火見聞略史』を残した。

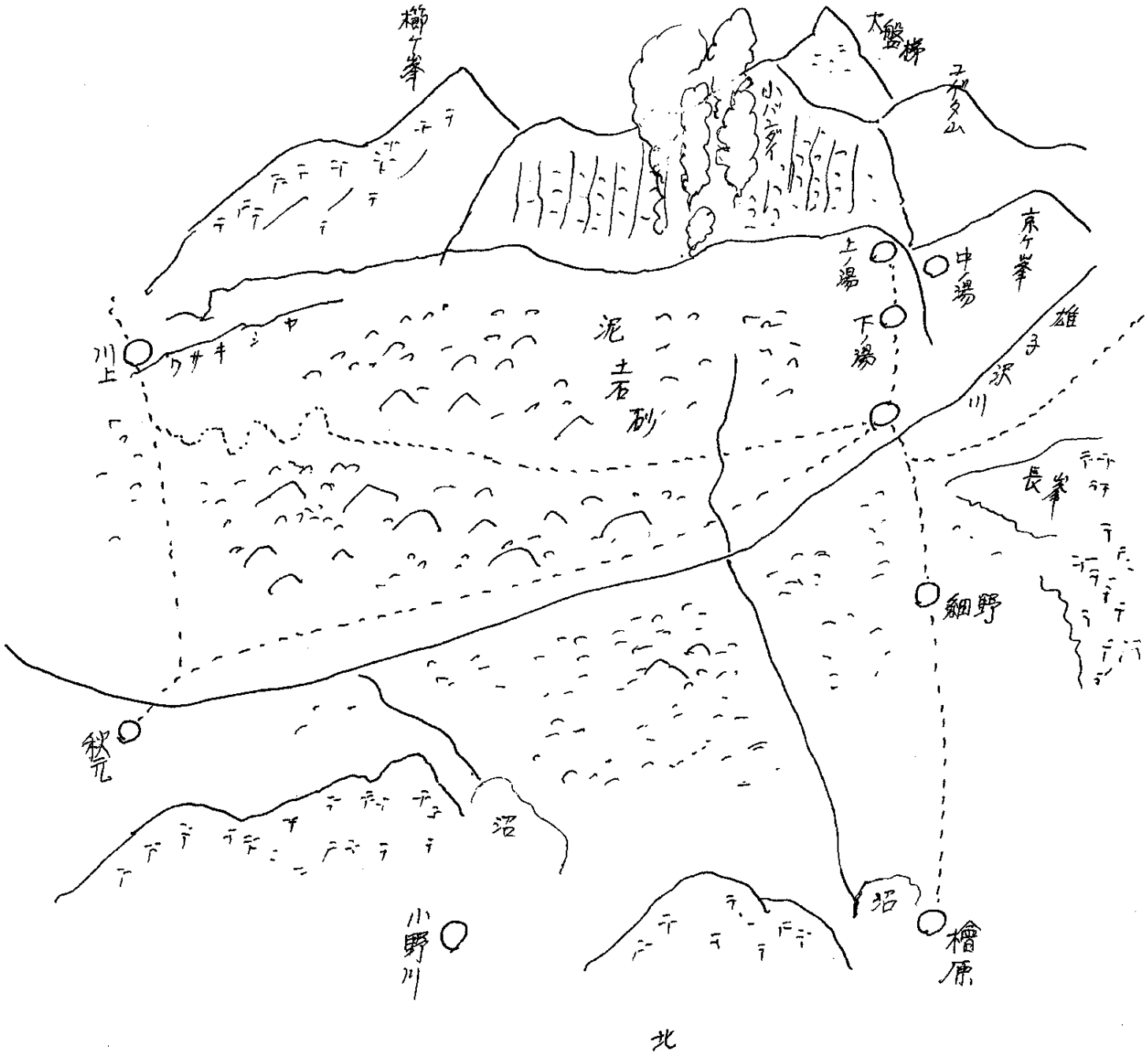
明治二十一年八月の草稿は、磐梯山の周囲の生々しい状況が、着色された緻密な絵図として、五枚（四か所）残されている。

木村昌平翁の絵図

北ヨリ見ル図・長峯ニテ

明治二十一年七月十六日

（筆者が線画で模写）



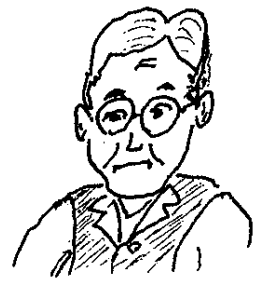
筆者追記

明治21年　秋元湖が満水
明治22年　小野川湖が溢れ洪水
明治23年　檜原湖が満水

噴火後のすさまじい光景を
激写していた人がいた！　（千世まゆ子著「百年前の報道カメラマン」より）

喜多方市の竹内写真館
初代　岩田善平

あとをついだ長女は
嫁ぎ先の竹内の名を継いだため
岩田の名前でなく
「竹内写真館」として
明治から百年以上たつ今も
つづいている。



（筆者の想像）

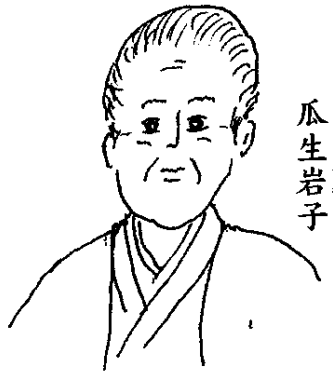
また、噴火直後から被災地を歩きまわって
村々の被害状況を克明に記録していた人がいた！
（「北塩原村史」より）

姥堂村の
白井徳次

徳次は、磐梯山が噴火する前から
上ノ湯・中ノ湯・下ノ湯の湯守（源泉の管理人）をしていたが、
噴火のために湯治場がだめになってしまったのであった。

この人も！

喜多方の
瓜生岩子



日本の〝ナイチンゲール〟といわれる。社会福祉の礎を築いた。
明治二十一年、女性初の藍綬褒章を授与された。

文政十二年、喜多方の若狭屋という油屋に生まれた。
少女時代は母親の実家である熱塩加納の山形屋で育った。
会津の戊辰戦争では、敵も味方も別なく
負傷者の手当てをした。
磐梯山噴火のことを新聞で知ると、
いち早く櫛を飛ばして古着を集め被災者に贈り
付近の寺を説き回って
死亡者のために法要を行い供養した。
また、渋沢栄一に招かれ、会津から東京の福祉施設の
指導者になった。

（ウェブ検索より）

また、日本赤十字社は、
戦時ではなく平時の第一号となる救護活動をした。

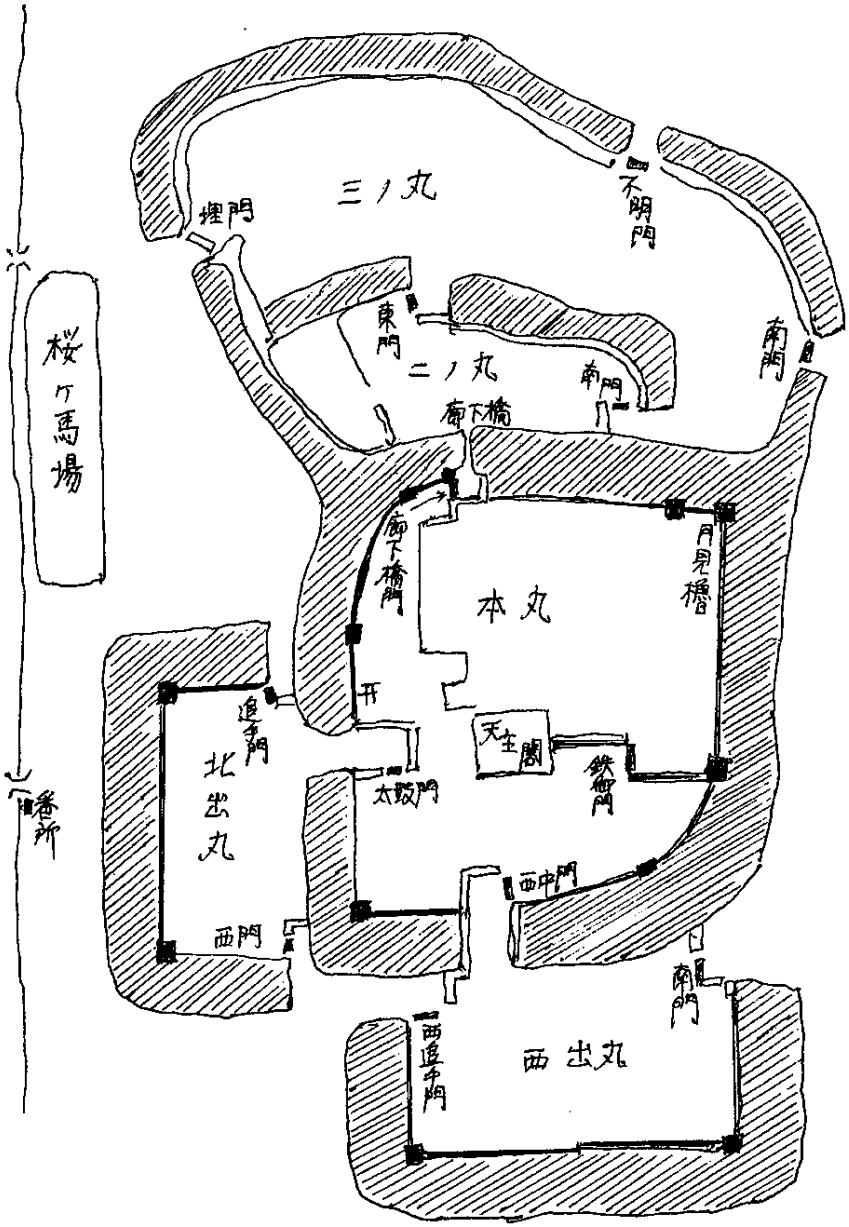
（明治二十一年七月二十二日 東京日日新聞より）

これは、皇后陛下の内旨を受けて日本赤十字社が派遣した派遣員が、地元猪苗代町の医師と共に仮病院で治療を行った。（この様子は、五色沼入口のところに建つ記念碑のモニュメントに描かれている）

各新聞は被災地への義捐金募集広告を掲載し呼びかけた。

奥羽日日新聞社（七月二十一日）
東京朝日新聞社（七月二十一日）
読売新聞社（七月二十二日）

場面は鶴ヶ城へ…

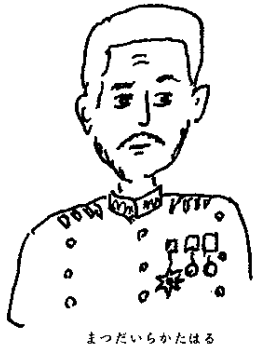


明治二十三年（一八九〇）鶴ヶ城跡地の払い下げの入札がなされた。

若松からの入札者はなく、仙台市の七十七銀行の頭取・遠藤敬止が金八六五円で落札した。

遠藤敬止は旧会津藩の藩士であった。松平家へ出入りしていた商人たちの募金による二千円（現代だと数億円）と合せて、城跡一切を旧藩主・松平家に献納した。

※松平家は財政窮乏していた



松平容大

献納

旧会津藩士
遠藤敬止

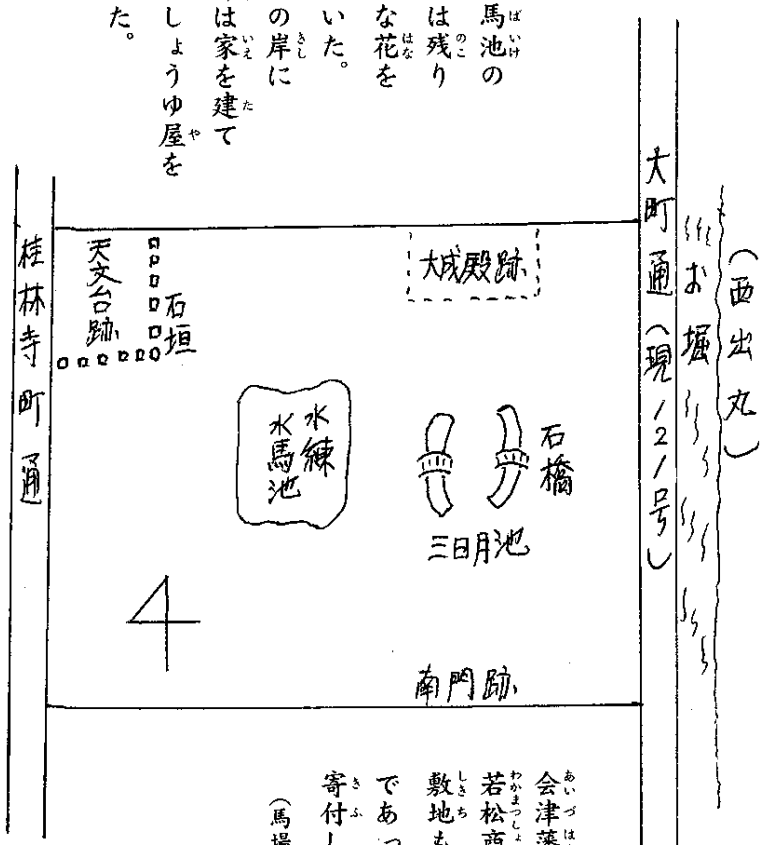
松平容大は、払い下げ代として一金二千円の領収書を発行している。

入札…希望者に見積り価格を書いて提出させること。

十二郎改め『十次郎』　妻・イク

十二郎は、大和屋の長女「イク」の婿養子となった。
そこで、自分の名前を改め
『遠藤十次郎』として分家し、
日新館跡地を買い求め
もとの〈みそ・しょうゆ屋〉を家業とした。
大町の米屋『大和屋』の家督は
イクの弟の遠藤喜助に譲った。

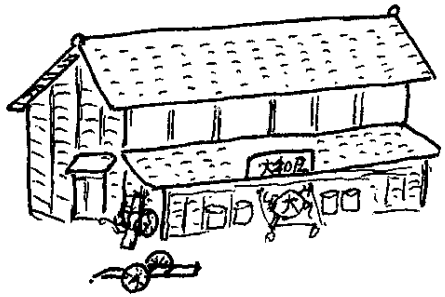
日新館は会津藩の藩校だったため、戊辰戦争で跡形もなく焼失し、その跡地は荒れ地のままだった。
その場所は、国道121号をはさんだ鶴ケ城の反対の西側で、現在の謹教小学校の近くにあった。



石橋と
水練水馬池の
アヤメは残り
きれいな花を
つけていた。
この池の岸に
十次郎は家を建て
みそ・しょうゆ屋を
開業した。

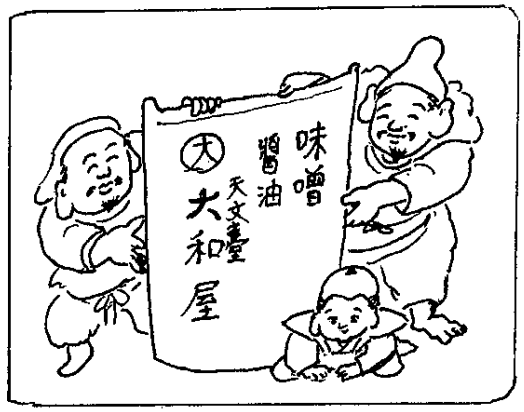
会津藩の天文台や
若松商業高校の
敷地も十次郎の所有
であったのを後に
寄付したという。
（馬場篤氏の記述より）

そのみそ・しょう油屋は



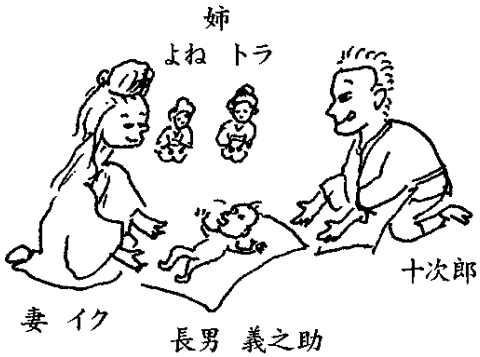
（筆者の想像）

看　板

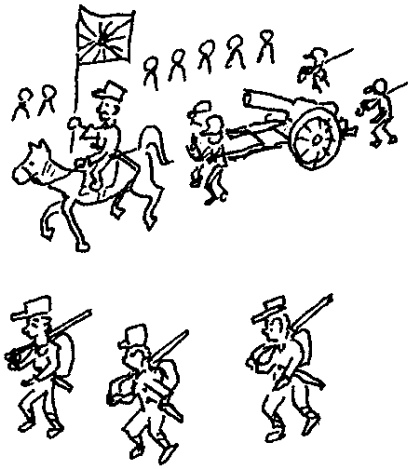


（佐瀬家の資料を模写）

明治二十六年（一八九三）
長男「義之助」が生まれた。
十次郎の喜びは大きく
稼業にもいっそう精を出した。
ところが、
幸せは長く続かなかった……



その翌年、明治二十七年（一八九四）から、
日清戦争が日本と清国の間で起った。
十次郎は
戦争に行くことはなかったが、
明治二十八年十一月二日
妻イクが若くして病死した。
十次郎　三十一歳の時であった。



義之助（二歳）

！

清国…一六一六年に満洲に建国され、一六四四年から一九一二年まで中国と蒙古を支配した最後の統一王朝。

◇このころの世の動きを見てみよう

明治二十五年　五月・瓜生岩子が若松育児会を設置

明治二十六年　二月一日・海老名リンが若松幼稚園を創立

五月十九日・吾妻山が噴火

五月・野口清作が会陽医院に書生入門

十二月・瓜生岩子が若松で産婆講習会

同月・日本赤十字社が若松市委員部を設置

明治二十七年　三月四日・吾妻山爆発

十一月・新島八重子が赤十字看護婦の取締役を務める

同月・赤城平六没（会津自由党）

明治二十八年　三月・吾妻山小爆発

明治二十九年　五月・雄国沼が決壊

明治三十二年　四月・会津若松市が福島県内で初めて市政を施行、

初代市長　秋山清八

七月・郡山と若松間の岩越鉄道が開通

明治三十三年　七月・中島友八没（会津自由党）

同月・沼ノ平硫黄山が噴火、日赤医員が救護

同月・渋沢栄一が会津に来て政財界人とプロジェクト

十月・喜多方の矢部長吉が喜多方水力電気ＫＫを設立し、

北山の大塩川に水力発電所を造る

・会津電力ＫＫが東山の湯川に水力発電所を造る

明治三十五年

明治三十七年　一月二十日・岩越鉄道（若松―喜多方間）開通

六月十五日・遠藤敬止没

十月二十三日・新道（若松―田島間）開通

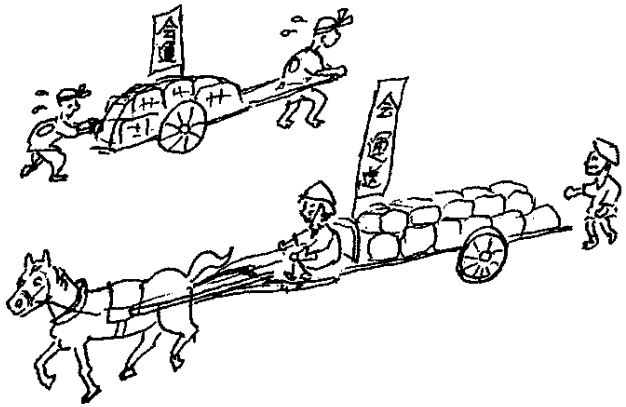
明治三十九年　二月十一日・蓮沼門三が修養団発会式を挙行

明治三十四年（一九〇一）

十次郎（三十七歳）

十次郎は、翌年に若松―田島間の新道が開通する見通しを知ると、みそ・しょう油業を家人と使用人にまかせて、会津で第一号となる『南会津運送会社』（栄町三丁目）を創業した。時流をとらえる先見があった。

力持ちの十次郎にとっては、荷物運びの運送業はうってつけの仕事。



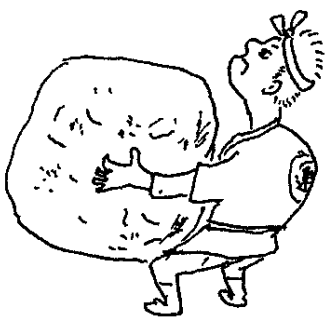
力自慢の男どもを集めて運送会社を作ったことは道路開通で物流が盛んになることを見越した新しい時代の先取りであった。

十次郎の体格

身長五尺四寸（約一六四㎝）

体重二十五貫（約九十五kg）

80貫（約300kg）の庭石を…



川に投げこむ

鉄道のレールを…

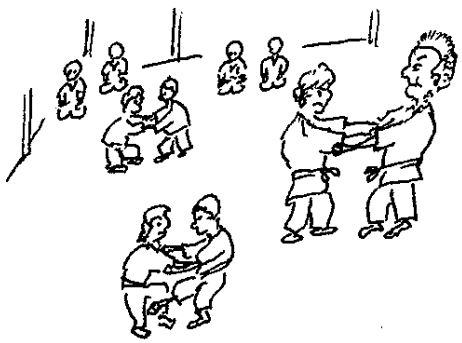
軽々とかつぐ

明治三十五年（一九〇二）　十次郎（三十八歳）

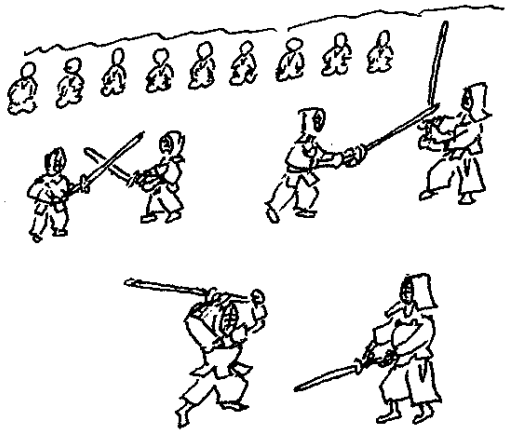
この年から大正十年まで、
十九年間にわたり京都で開催された
「全国演武大会」で優勝しつづけ
一度も勝ちをゆずったことがない。

十次郎は、
みそ・しょう油醸造業と運送業のかたわら
若松の天文台跡地の自宅（米代一丁目）で
庭を開放して剣道場とし、
数十名の剣士を養成した。

〈庭を道場に〉



〈雨天の日は
座敷で柔道〉



〈地元の警察や
学校で指導〉

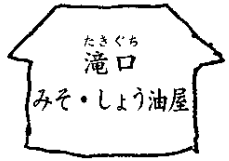
・若松商業学校
・会津中学校

小林栄助　　よね
（十次郎の二女）

このようなときに、十次郎は
自分の娘（二女よね・明治二十四年生まれ）に
小林栄助を婿養子に迎えた。
そして
『佐瀬』の姓を名乗らせて分家し、
家・屋敷を無償で譲渡した。

（佐瀬家の資料コピーより）

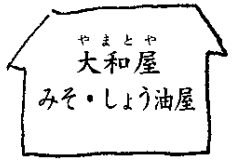
十次郎は、かつて自分が養子として入った佐瀬家が途絶えていたことを、
義理を重んじて長年気にしていた。
こうして佐瀬の名跡はつながったのであった。



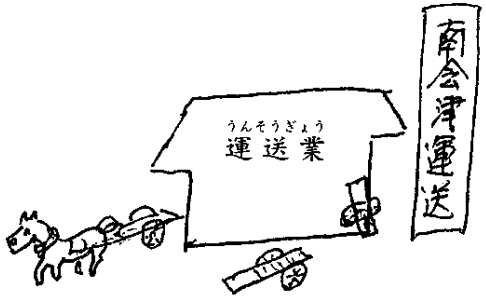
〈兄〉

〈栄助・よね〉
婿養子　二女

〈遠藤喜助〉
義弟・妻イクの弟



〈長男・義之助〉

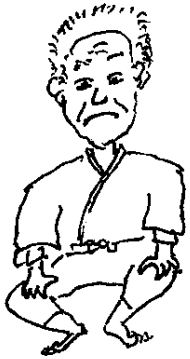


十次郎

順調に営業の業績が伸び
繁盛していた運送業を
義弟の遠藤喜助に譲り
自分は、みそ・しょう油醸造業に
専念することにした。

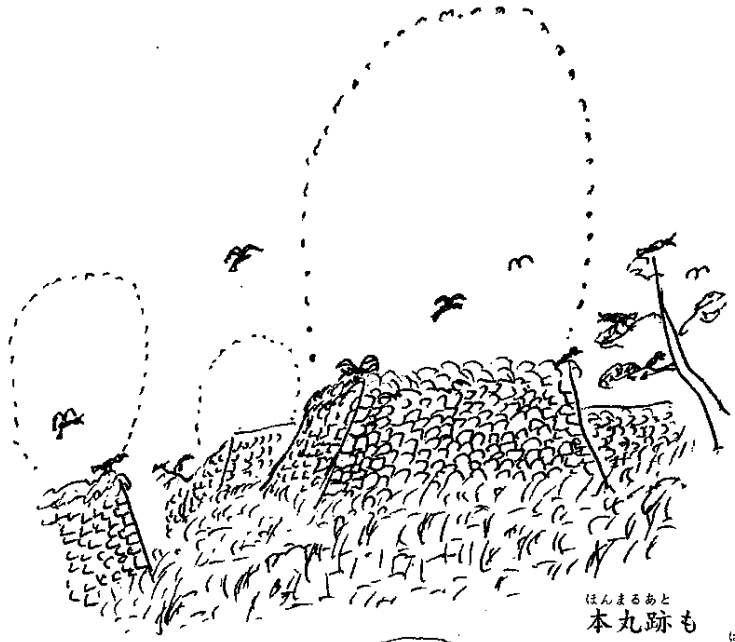
喜助

せっかく
うまくいっているのに
十次郎はいったい
何を考えているのか？



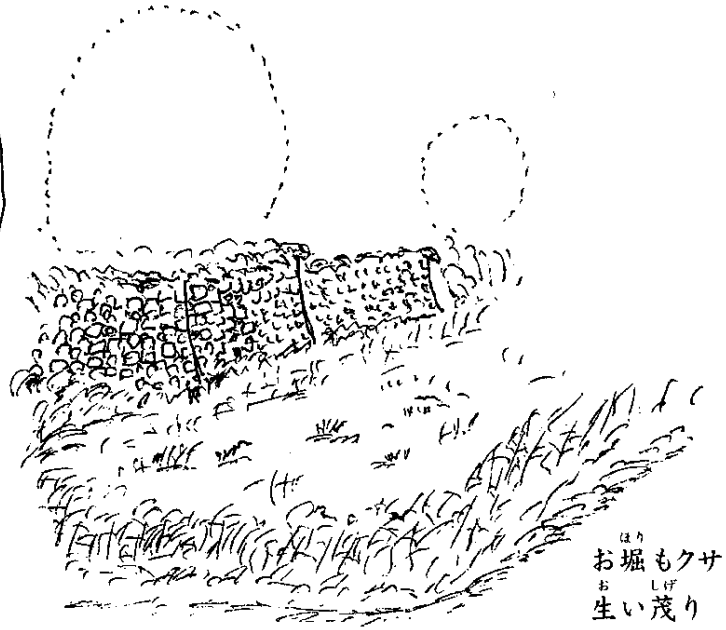
それは、大変な話が
ふりかかってきたのであった。

十次郎が城跡へ行ってみると…



本丸跡も
ススキが生え…

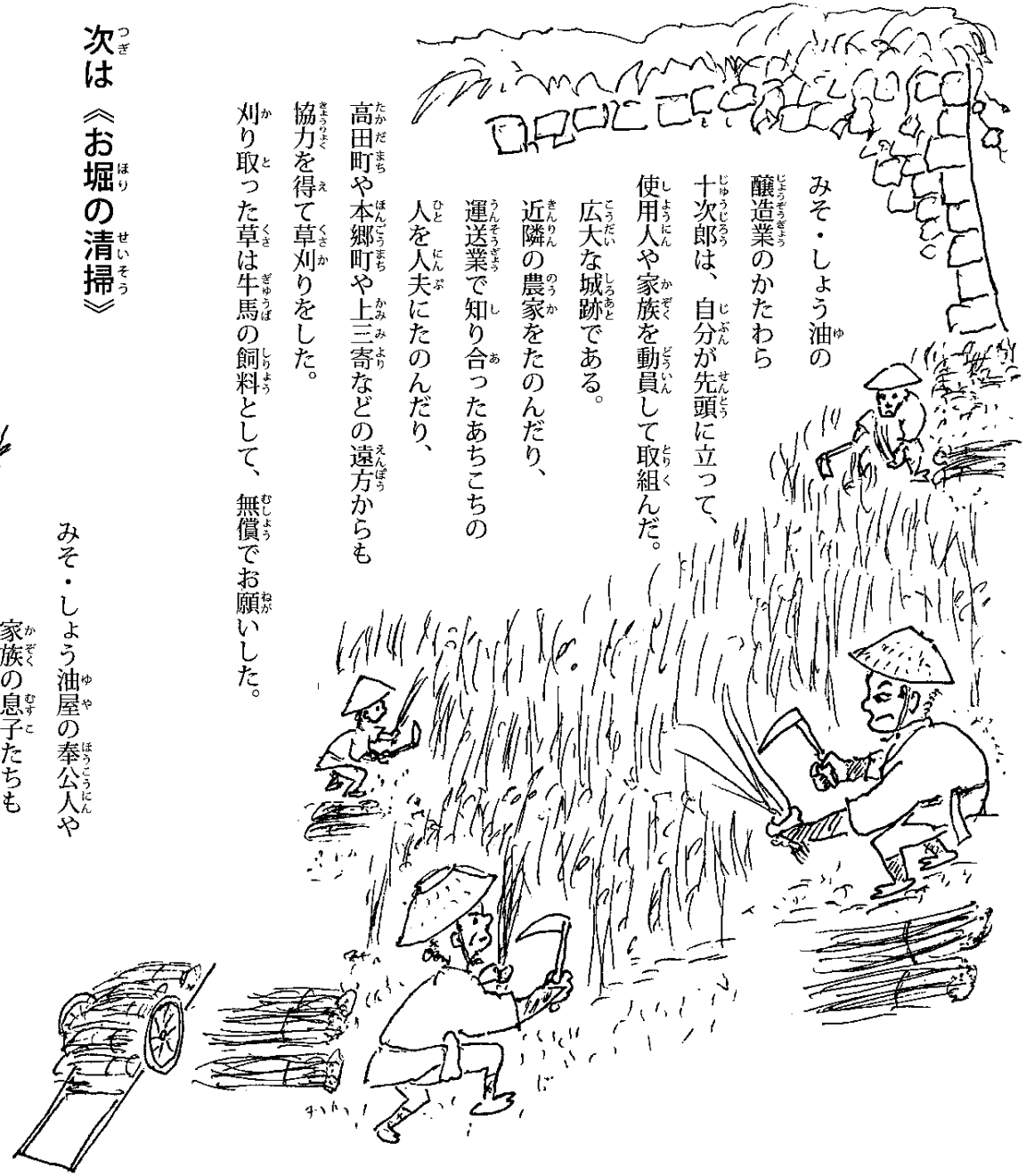
一部の土地は
付近の住民が勝手に
畑を作るなどして
使っていたが
大部分は
荒れたままになっていた。



お堀もクサヨシが
生い茂り

まずは《城郭内の草刈り》から

みそ・しょう油の
醸造業のかたわら
十次郎は、自分が先頭に立って、
使用人や家族を動員して取組んだ。
広大な城跡である。
近隣の農家をたのんだり、
運送業で知り合ったあちこちの
人を人夫にたのんだり、
高田町や本郷町や上三寄などの遠方からも
協力を得て草刈りをした。
刈り取った草は牛馬の飼料として、無償でお願いした。



次は《お堀の清掃》

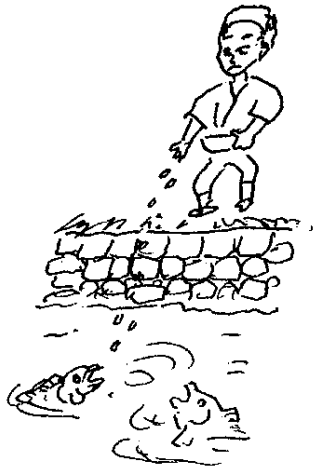
みそ・しょう油屋の奉公人や
家族の息子たちも
いっしょうけんめい作業をやった。

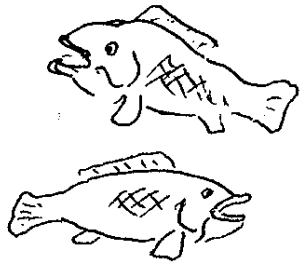
配管設備を整え、堀に水がたまるようにし、排水できるようにした。

こうして、表堀・五間丁堀・霞堀・西出丸堀を清掃した。

そして、お堀の水がきれいになったところで…

《鯉の養殖》を計画した





市民に安価で新鮮で栄養のある鯉を提供することに成功した。

お堀で養殖した鯉は東山温泉に買ってもらい東山温泉名物の「鯉の旨煮」として研究を進めた。

こうして、数年後には一万貫（約三十七トン）の生産をするようになった。

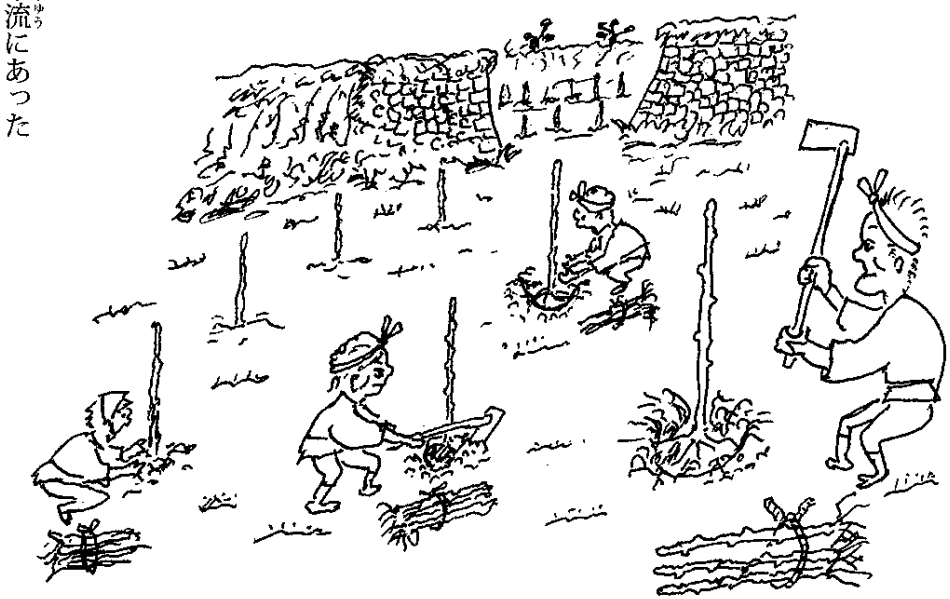
鯉が売れると、その利益は城跡の整備と開発の資金とした。

松平家は、広大な土地と山林を所有していたが収入はなかった。

そこで、十次郎は松平家の収入源につながる事業を！と考えた。

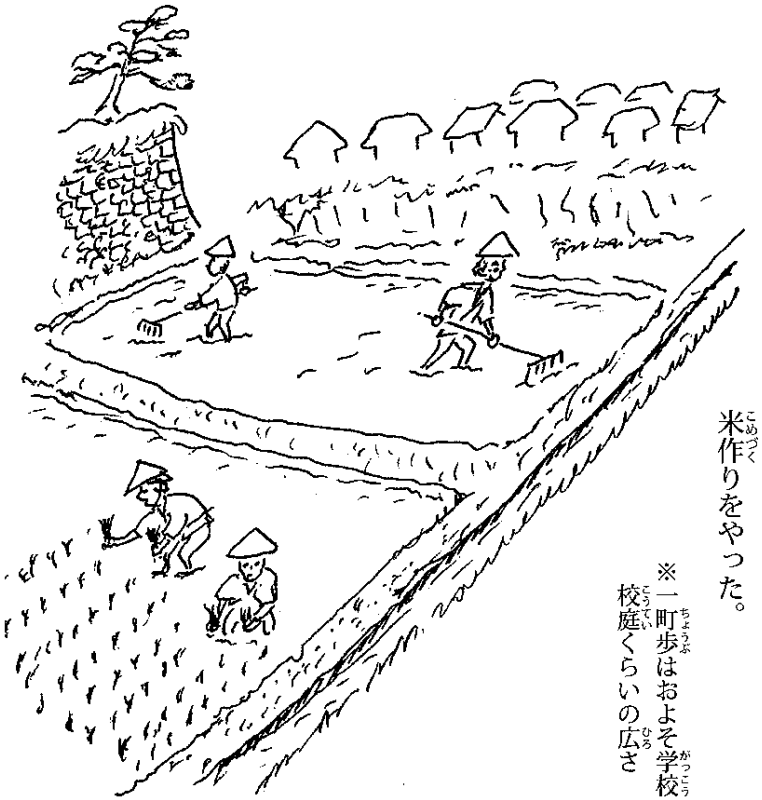
その一つは…
《城跡の平地に桐の木を植える》

桐の木は、桐タンス・桐下駄・箱類など、
会津の伝統産業の材木として
需要が多い。
六〇〇〇本あまりの苗木を植え
ねらい通りの収入を得た。
また、市民に土地を貸して
一反当たり、米六斗の収入を得て
城跡整備の費用にまわした。

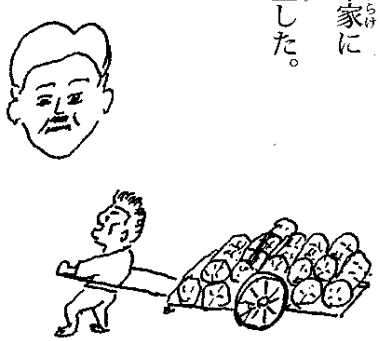


二つ目は
《水田づくり》

城跡の西側の堀の下流にあった
十余町歩の桑畑を
田んぼに作りかえて
米作りをやった。
※一町歩はおよそ学校の
校庭くらいの広さ



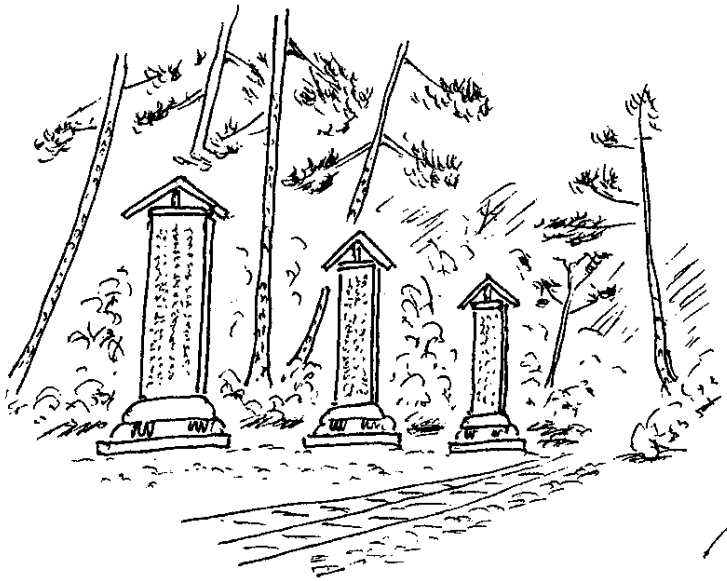
収穫した米は
松平家に
献上した。



三つ目は《杉の植林》

会津藩祖である
保科正之を祀る
猪苗代・見祢山の
土津神社の山に
杉苗を植えた。

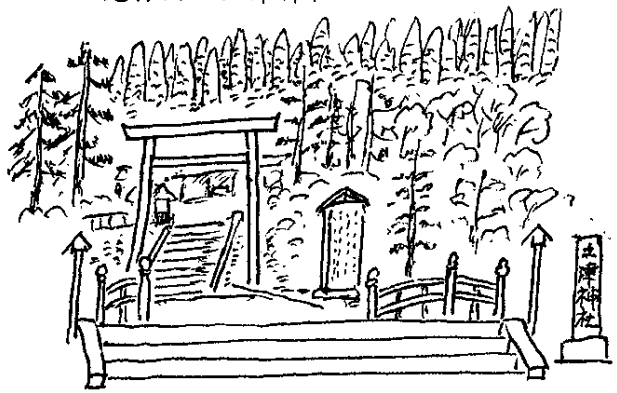
松平家の墓地、
東山の御廟の
山一帯の山林を
間伐し
杉苗を植林した。
杉はさまざまな
用材になる木で
需要が大きい。



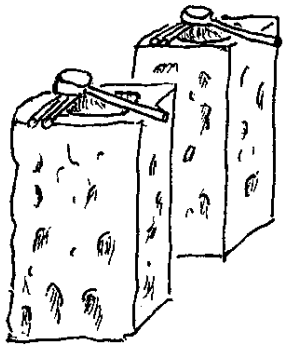
東山　院内の御廟

磐梯山

見祢山の土津神社



十次郎は、着想の豊かさ、
確かな技術力、豊かな財力など
事業家としての才能を充分に発揮した。
城跡の整備と植林による
事業の成功に対し、
松平家から謝意を込めて
歴代藩主が使用した
「手水鉢」一対をいただいた。



約五十cmの角形で
高さ約百cmの四角柱

場面は裏磐梯へ…

明治四十年（一九〇七）八月、十次郎四十三歳
鶴ヶ城跡地の整備が一段落し、
開田や植樹、鯉の養殖事業が軌道に乗ったころ。
十四歳の長男・義之助を連れて
裏磐梯の桧原川へ出かけた。

それは、
桧原川の水量や
水流、地形などの
下見調査が目的であった。
しかし、何のために？

そして、磐梯山の噴火口の付近に立った時、
特別の思いがあった…

明治二十一年の磐梯山噴火で、
付近の住民の多くが死亡し
荒廃してしまったことは
本当に悲しみに胸がつまった。
あまりの無惨な光景に
あちこちで足が止まった。
”何ということだ!!
噴火から十九年もたった今も
まるで荒蕪地のままだ！“
いったい十次郎は何のために来たのか。

そのわけは…（筆者の推測）

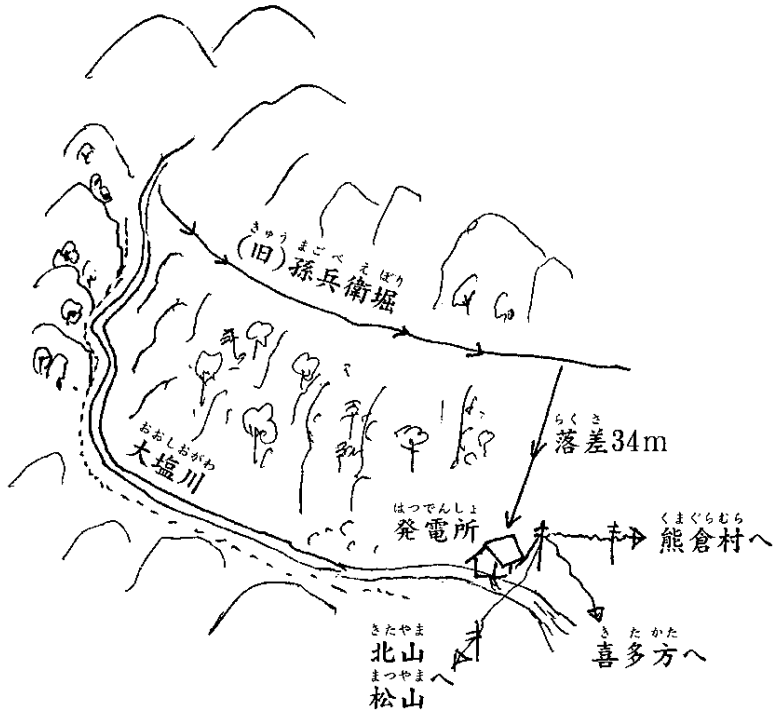
それより七年前の明治三十三年

矢部長吉

喜多方の酒造業『矢部長吉』が、
大塩の北山地区で
水力発電事業を始めた。
大塩川の水を利用して、
『喜多方水力電気株式会社』を作った。

（「北塩原村史」より）

矢部長吉は、北山村の岩下に着目。
旧「孫兵衛堀」の用水路を補修して、
大塩川から水を揚げ、落差一一〇尺（約三十四m）
の地点から水を落として水車を回して発電。
明治三十三年一月、地主の矢部長吉、他五名が
「願人」となり、福島県知事（山田春三）に願い出た。
それによると、
・「水路工費」一一、二七〇円九七銭
・水路幅二間、深さ一間、「水車」はドイツ製のタービン式七〇馬力一台
四月九日に県知事より許可された。
発電した電気は、喜多方町、熊倉村、北山村、松山村へ配られた。
一株五十円として、六万円の株金で三万円以内で工事をする。電灯需要者一〇〇〇名。
そして、当時各地で盛んになってきた製糸会社が電気を必要としていた。
このことが十次郎を刺激！



矢部長吉

関本藤内

佐藤五十郎

広田　東

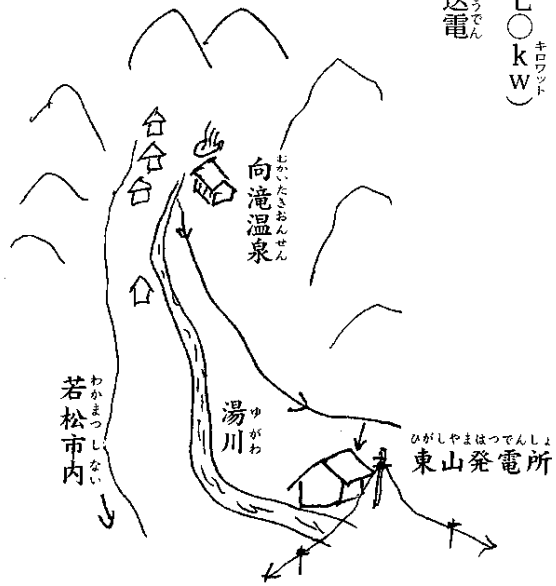
小荒井茂八

五十嵐小太郎

さらに、同じころ（明治三十五年）

若松の東山では、湯川の水を利用して
「会津電力株式会社」による「東山水力発電所」（出力七〇ｋｗ）
が作られている。※市内、一箕村、東山村、町北村へ送電
会津地方で第二番目の発電所だ。
これらのことが、十次郎を啓発し
電気事業は新時代の事業として
意欲をかきたてられたのである

（筆者の想像）



と、いうことで
前ページのように
裏磐梯の桧原川へ
川の調査に出かけた
のであった。

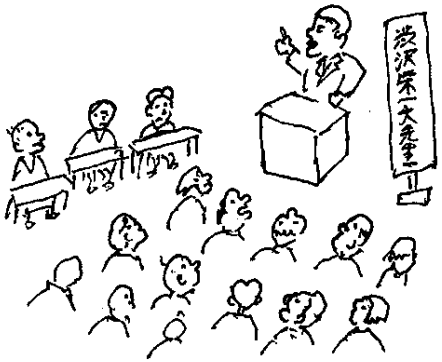
そこで十次郎親子は
喜多方の矢部長吉の長男
矢部善四郎と出会った。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

この新事業のきっかけは…

実業・経済界の大御所
渋沢栄一

明治三十三年（一九〇〇）
渋沢栄一が会津に来て
政界・財界人に呼びかけ
巨大プロジェクトが
会津地方で展開
されていたのであった。

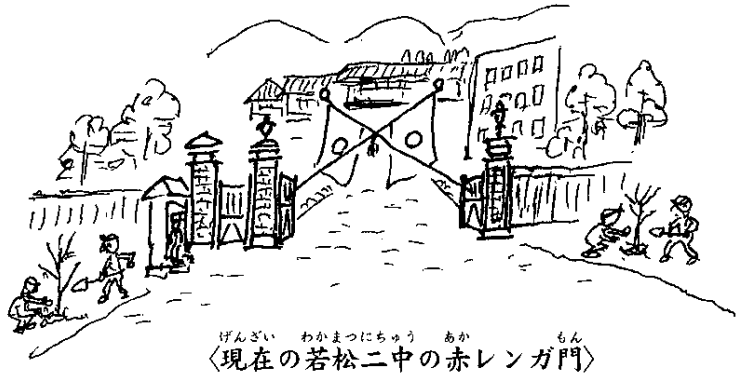


場面は若松に移って

明治四十一年（一九〇八）六月　十次郎四十四歳

前年、仙台市で編成された
陸軍歩兵第六十五連隊が
この年、会津若松市に移駐された。

これを記念して
十次郎は何人かの協力者と共に
連隊の正門付近と鶴ヶ城跡内外に記念植樹として、
ソメイヨシノ（染井吉野）の桜苗木一〇〇〇本を植えた。
連隊の付近や鶴ヶ城だけでなく
栄町通りなど、郷土の発展を盛り上げる
社会事業として思い立ったのである。



〈現在の若松二中の赤レンガ門〉

十次郎が私財をつぎ込んで進めた
若松市内の桜の植樹事業は
町の南側から川原町、南町、天寧寺町
そして東山、飯盛山沿いに植樹し
三千本の桜並木で町を囲む計画であった。

各町内の青年会の協力を得て
半分まで植樹が進んだところで…

県から 待て！

〈川沿いの植樹は『河川法』に抵触する！〉

という理由で
『全て抜き取ること！』
という命令がきたのだ。
せっかく植えた三千本の桜の苗木を
すべて抜き去ることになった！

桜を抜き取る心境は、どのようであったろう…
更に、『始末書』を書くことになった十次郎は、潔く謝った。
十次郎の清廉潔白さを示す、一つの出来事である。
この時に植樹した桜の古木が、
お堀端や川原町の城西小学校などに今も残っている。

！ 河川法…川の保全のために明治二十九年に作られた法律。

そして、いよいよ裏磐梯へ…

明治四十三年（一九一〇）十次郎　四十六歳

桧原川の調査で知り合った
喜多方の矢部善四郎から
〈磐梯山の噴火で荒れ果てた土地に
植林事業を計画したが、仕事半ばで
窮状に陥り困っている…〉という話しが届いた。
ここから、植林を始めるきっかけとなった。

実は、矢部善四郎の父親・矢部長吉は
喜多方の酒造業のかたわら、前ページのように
北山に水力電気発電所を作ってから間もなく
明治三十五年に、噴火で荒廃した土地に植林するため
官地の払い下げと借地願を県に提出し、
翌、明治三十六年に県から許可を得ていた。
その広さは七九一町八反一畝二〇歩。
千葉からアカマツの苗を取り寄せていた。

７９１町８反１畝２０歩　？

１町≒９９１７㎡

１反≒９９１.７４㎡

１畝≒９９.１７４㎡

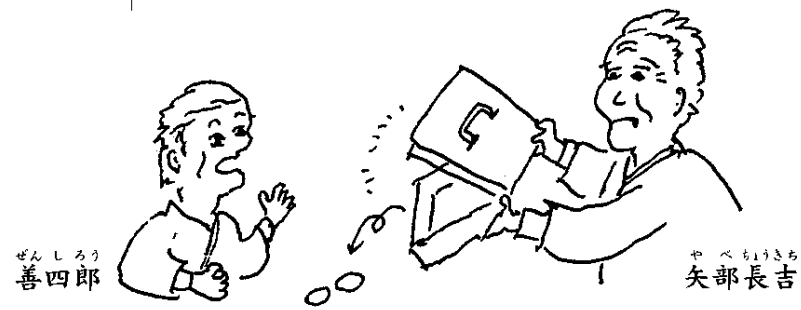
１歩≒３.３０５８㎡

１ｈａ＝１００００㎡

１ａ＝１００㎡

１町は、たて・よこ100mの正方形
学校の校庭より少し広いね

矢部長吉が計画した植林は、難事業であり、
喜多方から噴火口下の現地まで行くのに、
当時は、大塩を経て「取上峠」を越えて
桧原湖に出る道を、作業員を雇い苗木を背負って、
旧米沢街道を歩いて通った。
これは、かなりの苦労で、全財産を使い果たしてしまった。
家業の酒造業は人手に渡り倒産！
矢部長吉は床についてしまった。
県との契約は十五年の間で植林を完了させるというものであったが、
事業の半ばで断念せざるを得なかった。
地元の人によると、
―矢部親子は、義侠心に富み、親分肌で人のめんどう見がよかった―
という。
そして、長吉の後を継いだ善四郎は、亡家再興の名目で、
同志の小椋氏と共に、新たに官地の払い下げを願い出たところであったが、
金のやりくりに行き詰まり、植林事業半ばでまたしても行き詰まった。



磐梯山の噴火口より下の
荒廃した官地の払い下げの権利を
矢部善四郎から譲り受け
アカマツの植林に着目し、
私財を投入して
事業の推進を図ることになった。

十次郎は、私財だけでなく同志四名から金銭の支援を受けて
三五〇〇円の大金をはたいて善四郎に支払った。

◎十次郎の四名の同志とは

宮森太左衛門
（呉服店主）

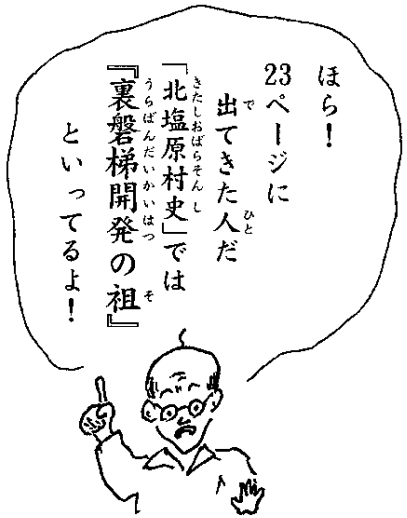
戸田惣左衛門

松本時正

葛岡庄太郎
（十次郎の甥）

大正三年（一九一四）十次郎は、矢部善四郎から権利を譲り受けた。
こうして、いよいよ十次郎の植林事業が始まるのだが…
その前に、
この人について語らねばならない。

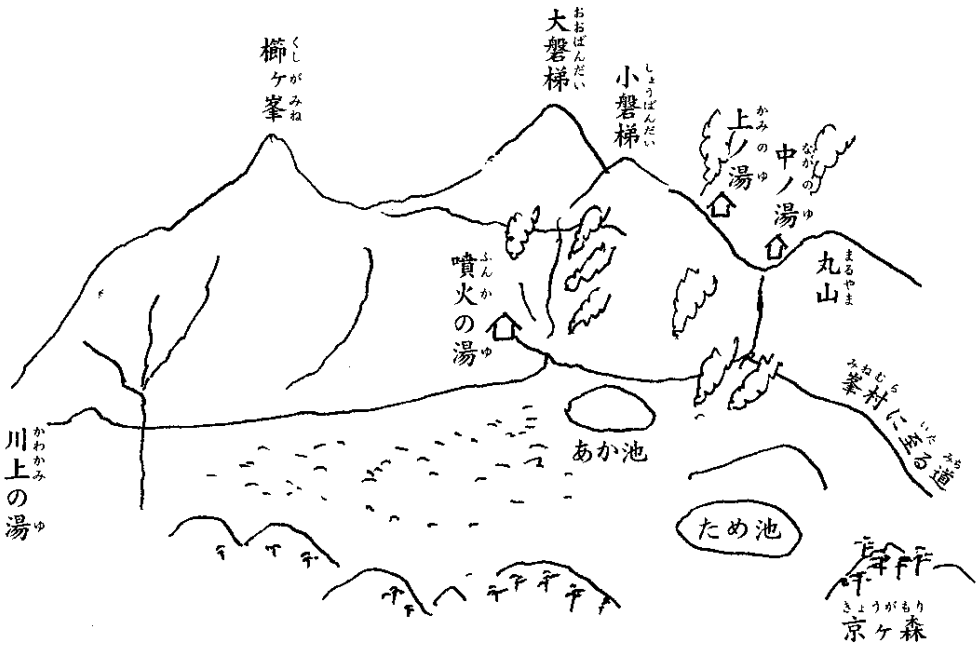
白井徳次
塩川の
姥堂村の人



そもそも白井徳次は、塩川の農家に生まれたが
若いころから体が丈夫でなく、噴火の前から長年
「上ノ湯」「中ノ湯」「下ノ湯」といわれる
磐梯山の湯治場で養生していた。
そして、湯宿から頼まれて
湯守を兼ねるようになっていたのである。

（「北塩原村史」より）

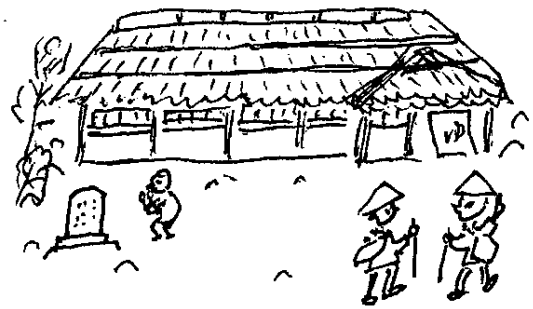
白井徳次



《磐梯噴火の湯》

銅沼のほとりに「白井館」「須田館」「磐松館」の3館があった。（明治28年～昭和29年まで）
昭和29年4月3日の山崩れで全滅して、今はない。

《筆者の想像》



この白井徳次は、矢部長吉よりも早く、十次郎より八年も前に植林していたのだ！

明治二十九年、噴火口の近くに自力で温泉小屋「磐梯噴火の湯」を再開設し、被災者供養の碑も建てた。

明治三十五年には、徳次は雄子沢の佐藤栄二郎と二人で、噴火口下の官地、約一四〇ヘクタールの借用願いを出している。

（「北塩原村史」より）

それによると、

《十年間で約四十二万本の松を植える》

とする植林計画を県に提出したのであった。

白井徳次

佐藤栄二郎

県から許可が下りると…

白井徳次

徳八
（徳次の長男）

佐藤栄二郎

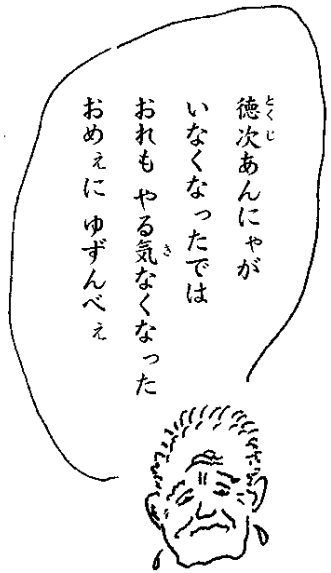
明治三十五年、息子の徳八と佐藤栄二郎と三人で植林作業を進めた。

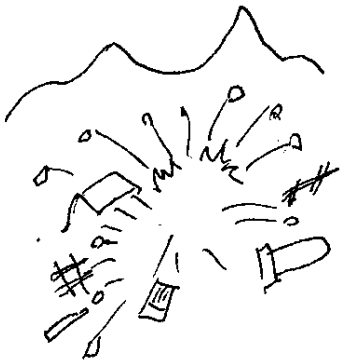
「さて、今日もがんばんべ！」

せっかく植えたマツが枯れている！
植えなおして補植したぶんも、うまくいかない！
やっぱりマツでもだめか…　この荒れた岩ばかりでは無理か…

樹種の選び方や植付けの方法や植樹後の手入れなど、
適切でなかったために、うまくいかなかったのだった。
白井徳次は、事業が未完成のまま、
失意の中で明治四十四年に六十七歳で亡くなった。

共同願人の佐藤栄二郎は、
せっかくの努力のあとと借地権を
徳次の息子の徳八に譲った…。
それから四十三年後、
昭和二十九年の磐梯山の小噴火で、
「白井館」の湯も供養碑も
吹き飛ばされてしまうことになる。
そのため、今ではあとかたもなくなった。

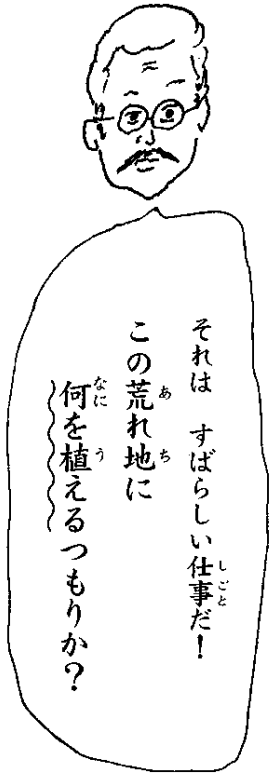


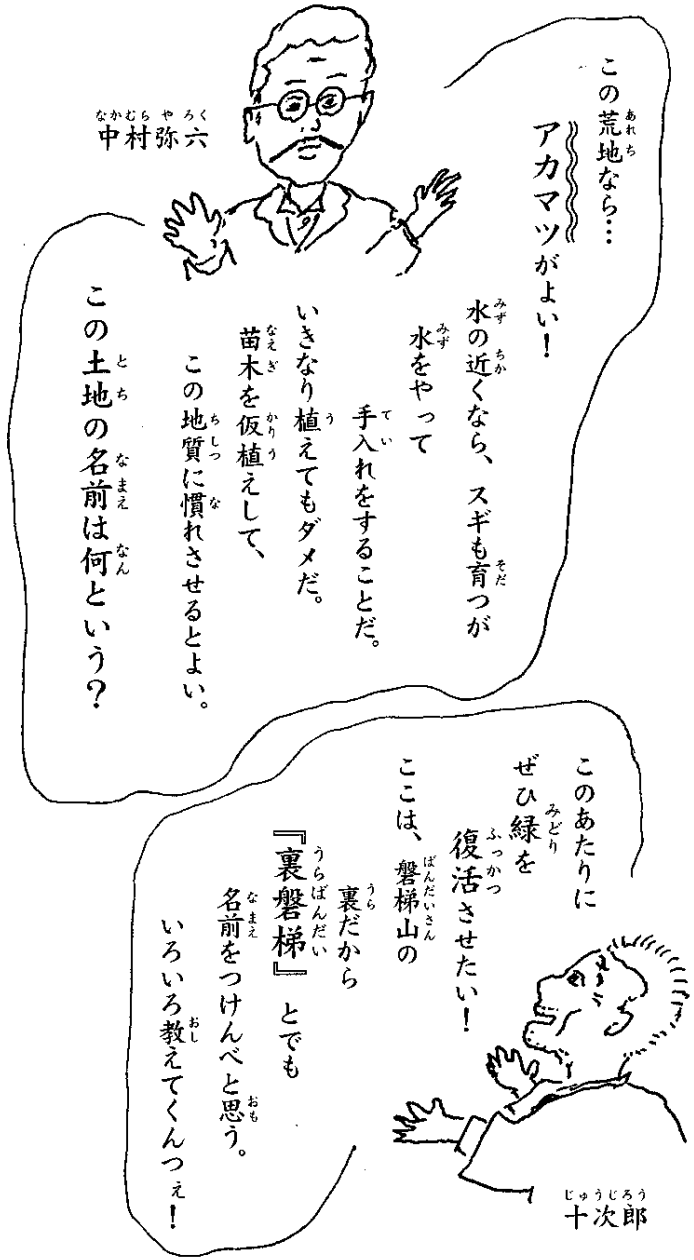


さて、十次郎であるが
大正六年（一九一七）六月
本格的に植林事業に取りかかる前に、
苗木などを運ぶための、作業道路を作った。
運送業の経験から
人間の背や牛馬の背でなく
物資運搬と道路の重要性を
わかっていたのである。

この作業をしている時に

たまたま狩猟に来て、裏磐梯の噴火の状況を確かめようと
訪れていた林学博士の中村弥六と出会った。
これは、十次郎にとって大変な幸運であった。
中村弥六は、信州の旧・高遠藩士で、
日本で第一号の林学博士であり、帝国大学の教授であった。





十次郎は、植林の仕事を鶴ケ城の跡地や、見弥山や東山で経験していたが、噴火による荒蕪地は初めてである。

中村博士からのアドバイスは大へん参考になり、この後も、あれこれと指導を仰いだ。

そして、まず本格的に植林事業に取り組む前に『ベースキャンプ』を作った。

―　通い仕事や、仮宿ではダメだ　―

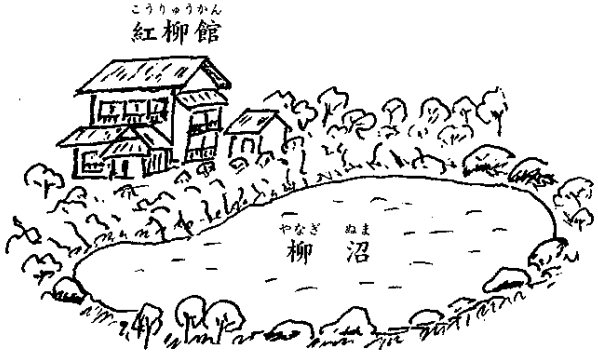
そこで、柳沼畔に二階建ての作業小屋・別荘を建て『紅柳館』と名づけ、人夫宿と事務所とした。

また、

作業頭として、斎藤丹之丞を若松から雇い、

桧原村から妻を迎えて、

紅柳館の管理人として住まわせた。



斎藤丹之丞
（25歳）

トメ
（20歳）

丹之丞夫妻は、十次郎と寝食を共にしてよく仕えた。
若い丹之丞は、
裏磐梯に植林事業を展開しようとする
十次郎の良い片腕となった。
中村博士も三年間、泊まりこんで指導した。

。。。。。。

苗は、中村博士の指導を受けて、
アカマツを樹種として選んだ。
はじめは、埼玉県の安行から十三万本
後には、雪国の新潟から買っている。
ほかに、
スギ一万本、ウルシ二万本
モミジ三百本
そして、サクラも買った。

馬車で運んできた苗木は、
中村博士の指導のとおり仮植した。
場所は紅柳館に近い柳沼と、父沼や母沼のそばで
現在の物産館のある場所であった。
仮植した苗床での管理も
斎藤丹之丞夫妻が担当し、
水やりを万全にして世話をおこない
定植作業に備えた。

猪苗代駅からは
裏磐梯まで細く険しい砂利道を
馬車で何度も往復して運んだ

猪苗代駅
までは鉄道で

十次郎は、私財をつぎ込んで「紅柳館」を建て、
苗木を買い入れ、植付け作業のための人足も集めた。
地元、長峯集落の小椋寅四郎や
佐藤フクたちは、毎日のように来て
植付人足として植林に励んだ。

（齋藤丹之丞氏の話より）

そして、
地元の桧原村や川上村、
遠くは、富山県からの出稼ぎ者を雇い、
一日に十人くらいの作業計画を立て、
自分も陣頭指揮をとり、長男・義之助も協力した。
馬車で運べない場所までは人足が背負って、
仮植した柳沼のところから運んだ。

ときどき、十次郎は若松へ用足しに出かけた。

また、あるときは

さて、こちらは鶴ヶ城跡…

《十次郎は、鶴ヶ城跡の整備をやりながら
裏磐梯の植樹の大仕事に取り組んでいたのである》

大正六年（一九一七）二月九日
平民（へいみん）・小作人（こさくにん）の遠藤十次郎は、
城跡に開墾した水田と畑の「小作契約」を結んだ。
城跡は松平家の所有で、
管理人は深田錠八であった。
十次郎は大町の米屋の
遠藤喜助に保証人に
なってもらった。

そしてまた、裏磐梯に戻ると
植林の作業に取り組んだ。

それから二年間、植え付けを集中的に行い
裏磐梯の植林を志してから十年をかけて完了し、
矢部善四郎から譲り受けた権利の責任を果たした。

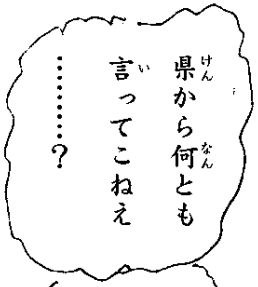
大正八年（一九一九）六月

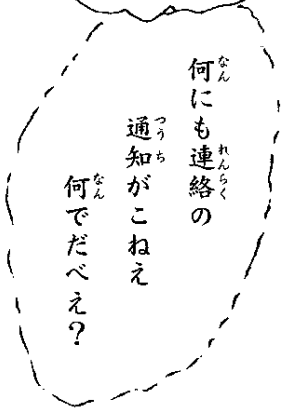
ようやく『植林成功届』及び
『官有地払下げ許可願』を、県あてに提出した。

つまり、
約束どおり植林事業を完了したので、
官有地を私に払い下げてください。
ということだ。
〝約束〟とは、
《噴火の荒廃地に植林し、成功者にはその官有地を払い下げる》
というものであった。

郡役所

ところが…





十次郎は、約束を果たさない県に
不審を抱いた。

十次郎

丹之丞

十次郎は、郡役所へ行ってみて、びっくり！
実は、県に提出したはずの書類は
一通どころか催促状も含めて数通。
それらがすべて、耶麻郡役所に保留されたままで
一通も県まで届いていなかった。

あろうことか。

それは、とんでもないことだった！

十次郎が提出した書類が郡役所に留め置かれたわけは、
郡長を中心とした役所の裁量で

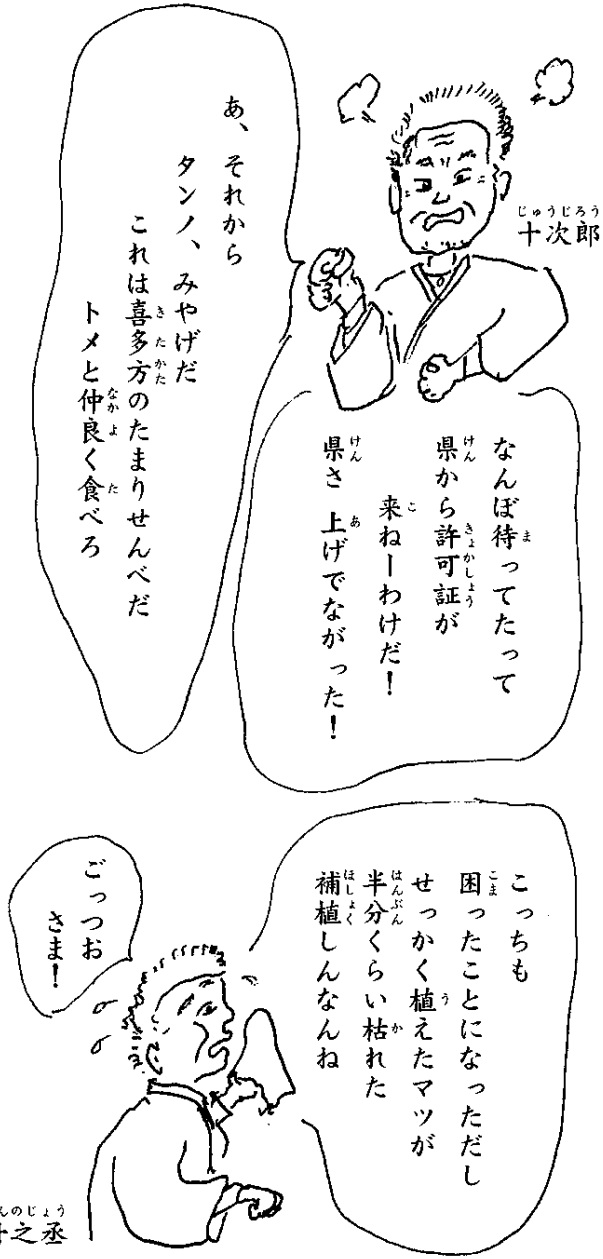
…〈この国家的な事業を
若松あたりの一個人に任せず
郡営にすべきである〉…

として、その**権利**を**奪**おうとしたのである。

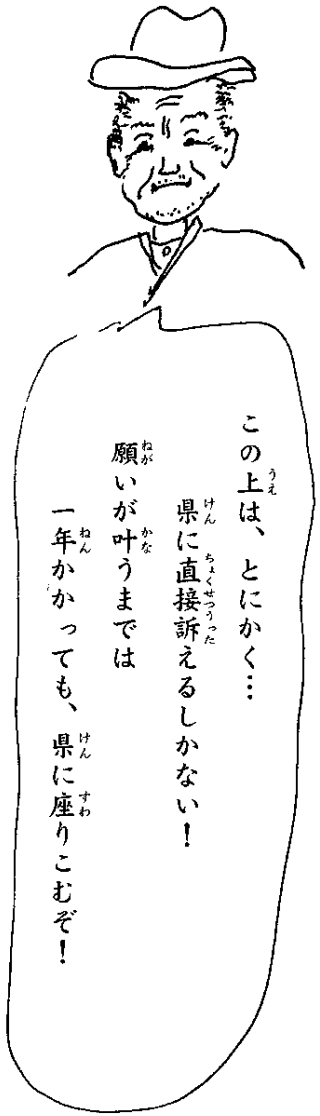
耶麻郡役所

十次郎

十次郎は、がっかりして帰ってきた。



どうしようもない状況になった！



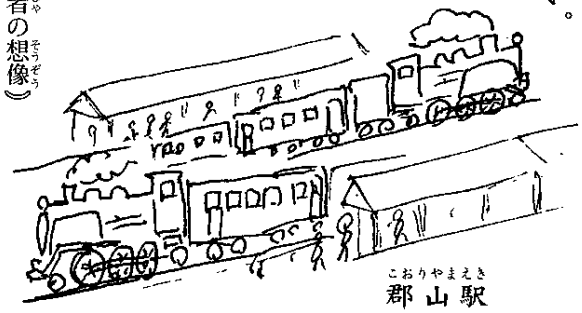
十次郎は、福島へ行くと言って出かけたが…

確かなあてもない。

しかも、
郡役所と県が
同じ考えで
受けつけられない
かもしれない…

郡山駅で
気が変わった。

《筆者の想像》



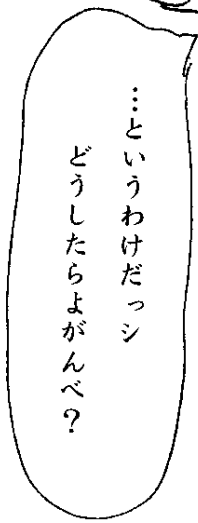
いや！　福島ではだめだ！
東京サ行くべ！
中村先生に相談すんべ！

というわけで、
行き先を変更し、すぐに上京した。

中村弥六

十次郎

十次郎は、
中村弥六博士に窮状を訴えた。



総理大臣・原敬
（平民宰相といわれた）

「中村君、
私から福島県知事宛に
『添書』を書こう。
そんな、
民を裏切るようなことが
あってはならん！」

というのは、
中村弥六は時の総理大臣（原敬）と
交友関係であった。

原敬は
大正デモクラシーの中で
政党政治家として誕生した最初の首相
盛岡藩の家老をつとめる家柄ながら
「華族」の爵位を受けることを
ことわりつづけたため「平民宰相」といわれた人物だ。

！

平民…官位や爵位をもたない普通の人民。
添書…使いの者に持たせる手紙。

十次郎は、原総理大臣から福島県知事（川崎卓吉）宛の『添書』を預って勇んで帰って来た。

この『添書』によって
耶麻郡役所の横取りを免れ
めでたく、官有地の払下げとなった。
そして
一九九〇町歩を一反三十銭で、
計　五十九万七千円の巨額を支払った。

十次郎
（55歳）

中村弥六

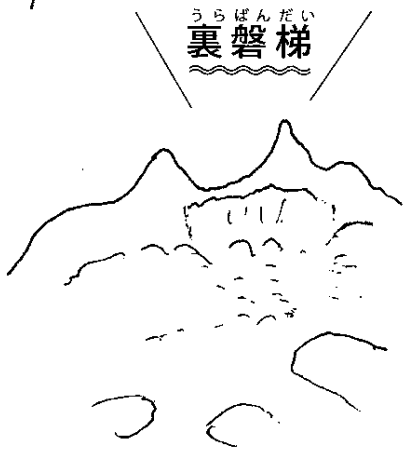
中村弥六博士は、当時すでに
〝ここは、将来世界的な
大森林公園になる地だ〟
とほめたたえられ
十次郎は博士の指導を仰ぎながら
事業を続行した。

十次郎

ところで

筆者はここまで『裏磐梯』という地名を用いて
話を進めてきたが、
噴火後の荒廃したこの地一帯に
『裏磐梯』という地名をつけたのは
この遠藤十次郎である。

（「北塩原村史」より）



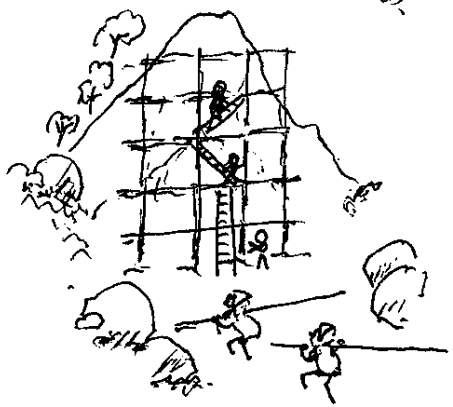
裏磐梯

原　敬
総理大臣

十次郎は
裏磐梯の地に世界的な
森林公園を企画し
アカマツの造成に尽力したことについて
時の総理大臣から賞辞を受けた。

十次郎は、柳沼畔の作業小屋「紅柳館」の東にある
裏磐梯随一の噴火の巨岩を自分の墓石と決めた。

墓の作業のための足場を組むため、
材木を会津若松から鉄道で運び
猪苗代駅からは
馬車で運び
柳沼のそばからは
人足がかついで運んだ。



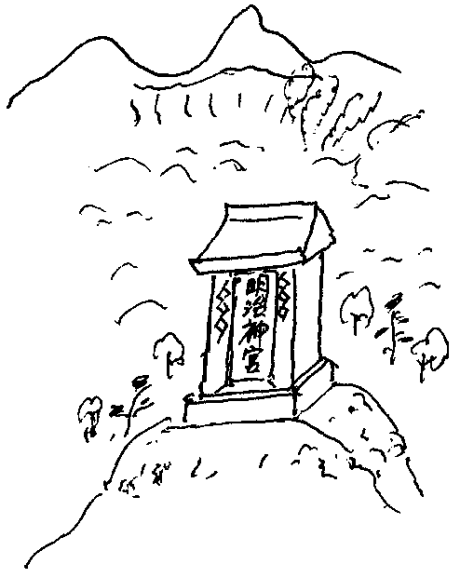
正に日本一の大きさである
「現夢」（十次郎）の墓の東側には
明治二十一年の磐梯山噴火で被災した
桧原村はじめ多くの村々の
人々の慰霊のため、
田中智学に揮毫を依頼して
供養碑を建てた。
（それまで二十年間も
供養する親族もいなかった）

・岩の高さ　十五m
・岩の周囲　二十五m
「遠藤現夢墓」と
石工に刻ませたこの文字は
佐瀬三與の書で、
大きさが三十cmもある。

自分の墓の右下には、辞世の歌碑を建て
書は、息子・義之助の嫁テイに書かせた。

ながきよに
　みじかきいのち五十年
ふんかおもえば
　夢の世の中

十次郎は、十年もの長い間、労力と財力を傾けてきた
この「裏磐梯」の植林地に骨を埋める決心をしたのであった。
その墓のそばに神社を祀るつもりであったが、
〝神仏いっしょはよくない〟ということで…



十次郎は、墓に決めた大岩よりも
もっと磐梯山に近い「るり沼」の東方の
高台を選び、巨岩に「明治神宮」の文字を彫った。
鈴を納めて開発の守り神とした。
文字は中村弥六博士が揮毫した。
※昭和三十九年の新潟地震のため、大岩の下半分
が崩れてしまった。
現在、割れ落ちた岩が苔むし判読不能。

（令和三年三月三十日筆者確認）

十次郎は、恩義に篤い人だった。
植林が完了し、官地払下げが決着したところで、
樹種の選定や植林技術
官地の払下げなど
大変お世話になったので
現在の高原ホテル一帯を
寄贈し恩に報いようとした。
しかし、中村弥六はこれを固辞し
なんとしても受け取ろうとしなかった。

そこで、十次郎は…

いつか、中村博士が
若松の十次郎の自宅を訪れたときに
巨大な「手水鉢」に目を止め
感心していたことを思い出した。
〝欲〟のない先生だから…
あれなら
受け取ってもらえるかも！

十次郎が「手水鉢」を差し上げたい
と言うと
中村弥六博士は快く受けとった。
十次郎の真心に応えたのである。
※この「手水鉢」は37ページのとおり、松平家
から城跡整備の功により十次郎がいただい
たものだが、一対のうち、もう一つの方は
会津若松市庁舎が竣工したとき市に寄贈し
ている。（現在は、鶴ケ城の本丸に設置）

高原ホテル

弥六沼

そして、
中村弥六博士が受け取らなかった
土地にある美しい沼に
『弥六沼』と名づけた。
現在、裏磐梯高原ホテルの前にある。
十次郎が中村弥六博士への
感謝の思いで名づけた沼である。
裏磐梯で人名のついた沼は
この「弥六沼」だけである。

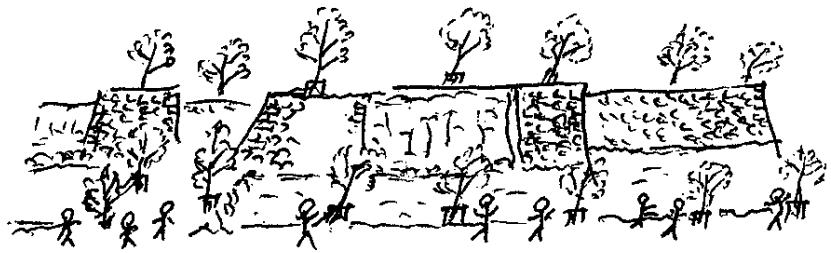
ここに描いてある「裏磐梯高原ホテル」は、この時代にはなかった。
現在は、高級リゾートホテルだが、昔はいろいろあっただぞ！
このあとのページに出てくるぞ！
弥六沼の向こうに、磐梯山が見える絵葉書のように
すばらしい景色のポイントだ！

さて、また鶴ケ城跡地のことだが…

大正九年（一九二〇）
十次郎によってみごとに整備された城跡を
《若松市の公園として、松平家から払い下げを受けよう！》
という話しが持ち上がった。

会津若松市議会議員

会津若松市議会議員一同が
《どうか旧鶴ケ城跡を市に
払い下げていただきたい》
と松平家に願い出た。



松平家（議員）

松平家は、
私共には異存がない。
しかし、城跡一切は遠藤十次郎に任せてある。
荒廃した城跡をこれほどに整備し
りっぱに復興させた十次郎の意見を
確認してから返答する。

十次郎の意見をききたい

十次郎

桐木の代金十五万円で市で買ってほしい

市の財政状態が悪くて買えない

市民のために協力してほしい

公共のためならやむなし！

ということで、
十次郎は桐の木の代金を
受け取らず、
市に鶴ケ城跡を引き渡した。
こうして、昭和九年
『鶴ケ城公園』と
命名された。

場面を裏磐梯にもどそう

十次郎は、植林事業をつづけ
裏磐梯の「自然公園化」をめざした。
そのために、同志とともに
『磐梯施業森林組合』を設立した。

理事

遠藤十次郎

専務理事

宮森太左衛門

監事

吉田常吉

宮森太左衛門が同志を集め、十名が出資者として協力した。

共同出資者

一口五千円で30口
資本金は15万円

遠藤十次郎（五口）

宮森太左衛門（五口）

戸田惣左衛門（五口）

葛岡庄兵衛（五口）

大島要三（五口）

河野善九郎（一口）

谷半兵衛（一口）

赤城大吉（一口）

成田太助（一口）

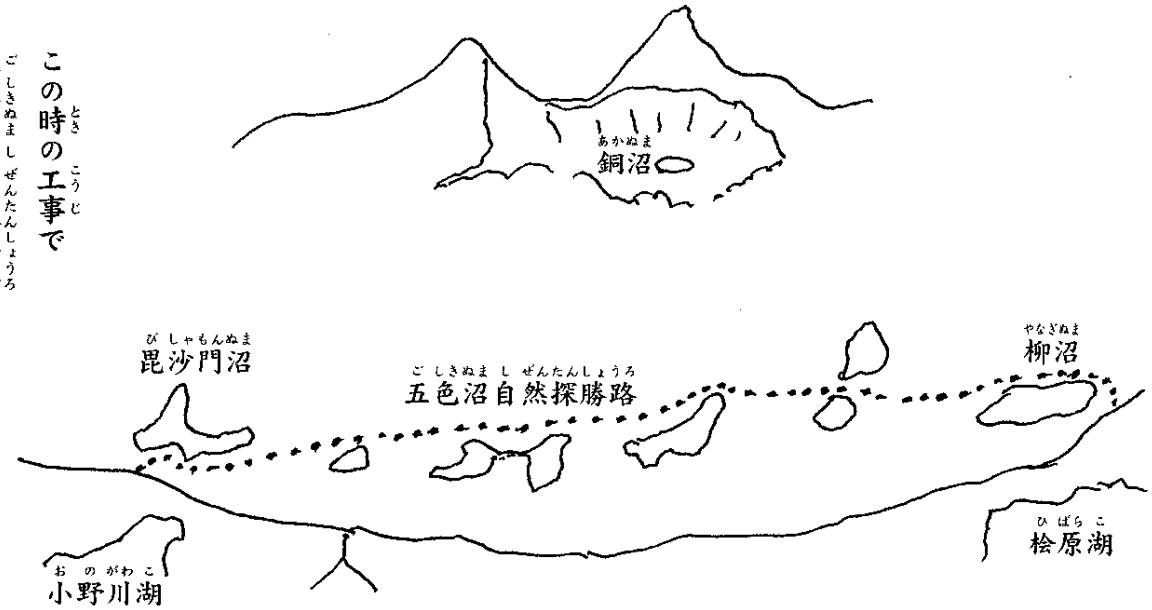
吉田常吉（一口）

〈設立趣旨〉＝本組合ハ森林施工上ノ困難ヲ排除シ磐梯山噴火ニヨル荒廃ヲ回復シ併セテ森林ノ利用ヲシテ国土保安ニ適合セシメ更ニ森林ノ美ノ開発ニ努メルコトヲ以テ目的トス＝

さあ、そうなると
公園には、お客様が来てくれるように
道路を作らなければ……

植林の苗木運びの道路だけではだめだ！
森林公園の中をお客様が散策する
道を作んなんねえ！

いくつかの沼のそばを通って…
大岩のそばを通って…
景色のいいところを通って…

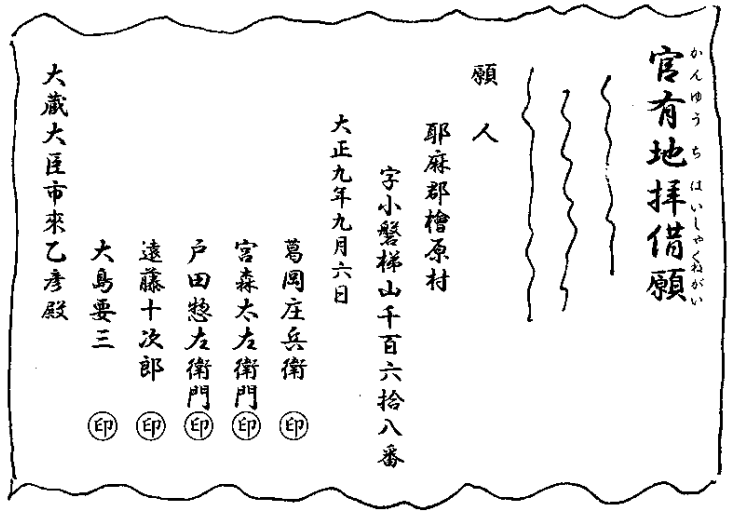


この時の工事で
五色沼自然探勝路と
高原駅に至る道路の原型が作られた！

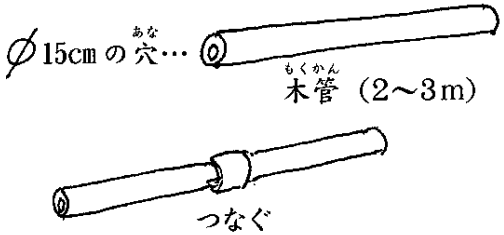
十次郎は、人夫たちの先頭に立って
各々、ノコギリ、山刀、ナタを腰に
クワ、トウグワ、鉄棒、細木などで
ヤナギの木を伐り
石をどかし、削ったり埋めたりして
工事をした。

十次郎の仕事はこれだけではない！

大正九年（一九二〇）九月六日
〝温泉保養施設を造んべ！〟
十次郎たち同志五名は
裏磐梯の官有地の拝借願いを
大蔵大臣に提出した。
これは、弥六沼の近くに
茅葺き二階建ての宿を建て、
磐梯山の「中ノ湯」の下から水を引き
噴火口に注入し熱した湯を下まで引いてきて、
温泉の宿泊施設を造るという計画。



木管パイプをつないで温泉を引いてくる



湯を引く木管は…
「京ケ森」付近から切り出した松の木を
磯谷定衛氏の発動機船で船付き場まで

現在の遊覧船乗り場

穴あけ加工

牛の背で山の工場場へ運ぶ

宮森の別荘を改修する
（現在の高原ホテルのところ）

この事業は同志の中でも
宮森太左衛門が中心となって進められた。
宮森は明治九年十二月十四日生まれで、十次郎より若い。
若松の桂林寺町の宮森呉服店の当主であった。
遠藤十次郎の良き片腕となった人物である。

宮森太左衛門

工事見積書によると
・源泉工事……一万円
・引き湯工事……二万五千円
※公務員の月給が二十円の時代。現代だと七億円以上か…

土木事業者でない宮森がこの事業を、
富山県の富豪・斎木氏の援助を得て行なった。
温泉宿は前ページのとおり、弥六沼のほとりにあった宮森の別荘を
保養施設に改修するというものであった。

《筆者の想像》

弥六沼のそばに
「軍艦岩」と名づけた大岩があった。
・長さ十m、幅四m、高さ三m
その上には不動明王を祀り
ふんだんな温泉水が出るよう祈願し
五人の名前を刻んだ。
遠藤十次郎
宮森太左衛門
佐伯利作
長井善吉
勝俣勘太郎
※同志のメンバーとちがう名前は
工事の技術者ではないか（筆者）

森林組合を作ったことにより、
植林事業と道路作りは順調に進んだ。
反面、
大変な苦労もあった。
十次郎と共に懸命に働いた斎藤丹之丞氏の話によると、
・約半分は水不足や雪で折られ、枯れて、補植や管理が大変だった。
・沼の近くは水があって助かった。
・京ケ森のそばにある杉の木は、当時植えたものだ。

斎藤丹之丞

一方、温泉作りの引湯事業は…

宮森太左衛門

十次郎

とんでもないことが持ち上がった！

確かに
森林組合の
設立趣旨には
書いてない
ことであった！
十次郎は、
森林組合の規則違反
として
理事の代表の責任を
問われ、
辞任することになった。

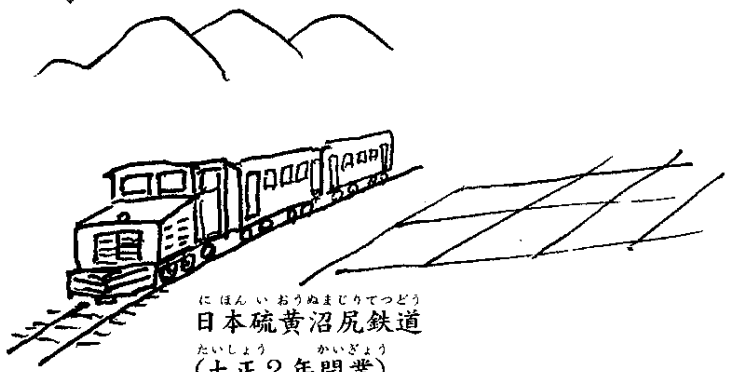
温泉事業も大金をつぎ込んできたが
うまくいっていない。
温泉付きの保養施設を作り
観光客を呼ぼうとした事業は失敗した。

失敗の原因と考えられることは、
▽湯量が不足していた
四キロメートルを超える距離をアカマツの木管で引き、噴火口の熱で加熱することは、アイデアは優れていたが、技術が及ばなかった。
▽工事費用が多額であった。
▽観光に対する世間の考えが未熟だった。
▽ホテル経営の指導助言者がいなかった。

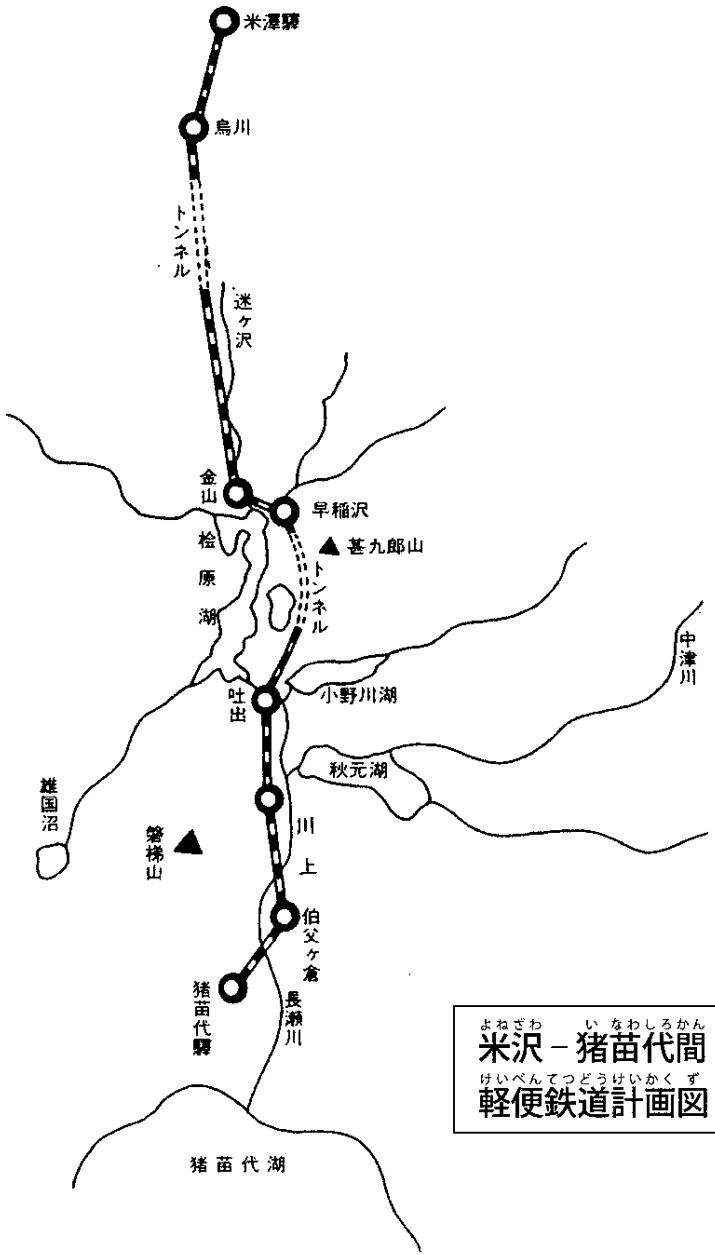
現在ならば『リゾート開発』である。
宮森や十次郎には、先を見る目があったが時代が早すぎた。
この失敗は、後日、田島慶三が昭和三十年に
宮森たちが引き湯した松の木の木管を修復し、
「裏磐梯高原ホテル」を作っている。
その時に修復した土管が、登山道に今でも残っている。

もう一つ

宮森太左衛門が果たせなかった夢がある。
それはちょうどこの頃に開業した
沼尻の軽便鉄道を裏磐梯にも実現
させようとするものであった。
それによると
◇猪苗代駅から、伯父ケ倉↓川上↓吐出↓トンネルで早稲沢↓
金山↓トンネルで山形県の烏川、そして米沢へ
というルートで、その計画図は次のようなものであった。
もし、温泉事業でつまずかなかったら、
どのようなことが実現していたことだろう。



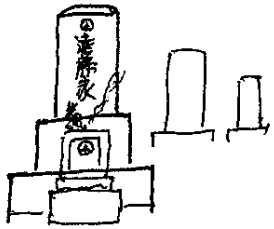
日本硫黄沼尻鉄道
（大正２年開業）



米沢－猪苗代間
軽便鉄道計画図

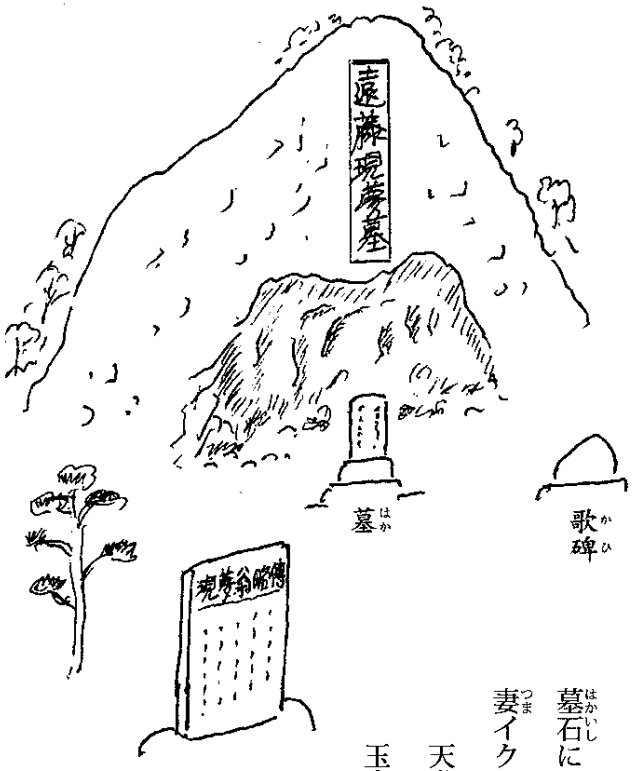
さてさて、森林組合で規約違反をして失脚し、
温泉事業でも失敗し、多額の借金だけが残った。
これはさすがに、十次郎にとって立ち直れない程のダメージだった。

過労が続き、夢が破れ、病の床に……
失意の中で
昭和十年十二月六日
十次郎はその生涯を閉じた。
享年　七十三歳　＝　合掌　＝



長男・義之助により
十次郎の遺骨は
会津若松の天寧寺に埋葬した。

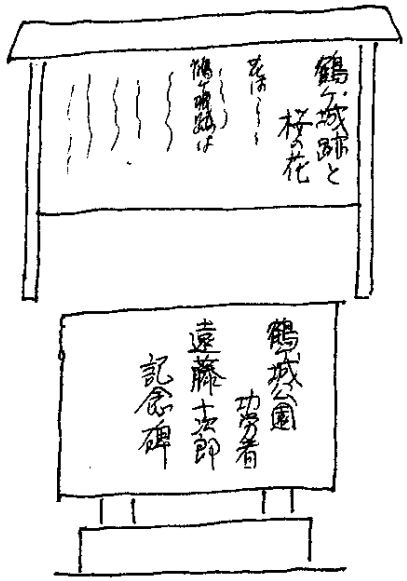
そしてまた
義之助は十次郎の意志により
かねて生前に自分で選んでおいた
裏磐梯の「遠藤現夢墓」の大岩の下に
爪と遺髪を埋葬した。



墓石には、若くして亡くなった
妻イクの戒名を並べて刻んだ
天遊院仙翁豊徳居士
玉容院正室妙光大姉
また、義之助は昭和三十六年
亡父　二十七回忌に
「現夢翁略傳」の
碑を建立した。

現在、鶴ヶ城の三ノ丸には…

手前の記念碑は、
平成二十六年に
遠藤十次郎顕彰会　代表　佐瀬　榮氏
（十次郎の曾孫）が建立
後ろの看板は
平成六年に会津若松市が設置している。
その文面は次の通り



鶴ヶ城跡と桜の花

「花は桜木　人は武士」と古言のとおり、鶴ヶ城跡は桜の花が美しく天守閣や石垣と桜の花はとてもよく似あい、思わず「春高楼の花の宴…」と土井晩翠の名作「荒城の月」の歌を口ずさむ

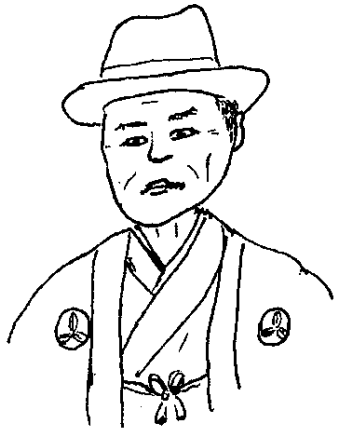
しかし、会津藩時代の城内には桜ヶ馬場以外に桜樹は殆んど無かったという。

今日のように桜の花がらんまんと咲き乱れる〝花の鶴ヶ城〟にしたのは、近くに住む遠藤十次郎（現夢先生一八六三～一九三五）の尽力であった。

会津松平家からお城の管理整備をまかされていた十次郎は、明治四十一年城跡の近隣に陸軍歩兵連隊が新設された記念に、同志とともに鶴ヶ城跡の内外に染井吉野の桜苗一千本を植樹することを考え、率先して奉仕作業をしながらその成果を見守った。

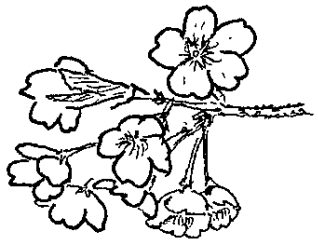
十次郎はその後、爆発で岩石だらけだった裏磐梯を、緑と野鳥の楽

園にした。植林事業をも苦心して成功させ〝裏磐梯の父〟と仰がれた人物であるが、私たちは彼のような先輩を郷土の誇りとするとともに、この鶴ヶ城跡をいつまでも美しく保っていくように努力していかなければならない。



遠藤十次郎

看板の文章の起草は宮崎十三八氏
（「蘇れ遠藤現夢さくら・アカマツ物語」より）平成十一年



「現夢翁略傳」

昭和十年十二月六日　享年七十三歳
現夢　遠藤十次郎　天遊院仙翁豊徳居士
明治二十八年十一月二日　享年三十一歳
妻イク　玉容院正室妙光大姉

裏磐梯国立公園ノ開祖遠藤十次郎ハ元治元年正月十日　会津若松新横町滝口太右衛門ノ十二男ニ生ル　後遠藤ノ姓ヲ継グ資性剛直物欲恬淡　国家ニ報ズルノ念篤ク醤油醸造業ノ傍ラ植林開墾ニ着目シ松平家ノ廟所見禰山ニ杉ヲ鶴ヶ城跡ニ桐ヲ植エ又濠ノ水利ヲ完成シテ養鯉ヲナスト共ニ数十町歩ノ美田ヲ開ク等　社会ニ貢献スル所大ナリ　明治二十一年磐梯山ノ大噴火ニ一望荒廃ノ此地ニ立チ一念発起シ数々ノ苦難ヲ克服遂ニ官地壱千数百町歩ノ払下ニ成功シ自ラ先頭ニ立チ鍬ヲ執リテ植林シ道路ヲ開発シ将来ノ大森林公園ヲ期シテ半生ノ心血ト私財ヲ傾ケテ事業ハ着々其ノ緒ニ就ク

後森林組合ヲ結成シ旧噴火口ニ注水シテ温泉トナスノ大工事ヲ発案シ成功セシモ此事ハ組合ノ法規ニ触レル所トナリ憂悶遂ニ病ヲ得テ再ビ起タズ　享年七十有三生前自ラ選ビシ此大墓石ハ噴火ノ際ニ飛来セシ最大ノモノニシテ永ク志ヲ傳フベク然モ其ノ功ヲ語ルモノハ其ノ手ニ植エシ松ノ緑ノミカ

嗚呼　不肖不敏父ノ終局ヲ全フシ得ザリシヲ憾ム

昭和三十六年　亡父二十七回忌ニ際シ　男義之助　誌

十次郎夫妻の墓　→その大岩

裏磐梯の墓（大岩）と略伝碑

天文台跡のそばに自宅があった

噴火罹災者の慰霊碑

天寧寺の墓

三ノ丸の顕彰碑（手前）と看板

新潟地震で崩れた「明治神宮」を祀った大岩

書き終えて

― お怒りにふれた ―

遠藤十次郎が、裏磐梯の開発と植樹の成功を祈願して、巨大な岩に「明治神宮」と刻んで祀ったという大岩はどこにあるのか。文献資料によると、〈るり沼の東方の高台〉と記載されている。

令和三年三月三十日、雪が消えてしまわないうちに行ってみようとして出かけた。グリーンシーズン中は、探勝路から外れて踏み込むことは、自然公園環境保護のために禁止だ。

小高い尾根筋を岩と樹木を縫うように登る。このアカマツは十次郎が植えたものか、この木はあとから生え育ったものだろう、などと独り言を言いながら高みを目指した。これが三回目の挑戦だ。前回は雪が多すぎてだめだった。岩が重なり連なり雪が半分解けているので、踏み披かないように気をつけながら登った。ちがった。ここではない。先輩は沢筋を登ると言っておられたな。とすると、この沢筋の向こうの尾根の高みかな？　岩の間に足を挟まれないように気をつけながら沢に下り、対岸の崖を岩や木につかまりながらよじ登った。

これに違いない。なんとなく確信した。近づいてみた。昭和三九年の新潟地震で崩れ落ちたというから、雪をかぶりながら大岩の下にいくつも岩がある。一つ一つのぞき込んでみた。

「アッ！」雪の間から覗いた岩の横面に文字らしいのを発見した。苔に覆われているので、枯れ枝で苔をこそぎ落とした。割れているので何という文字なのか決定的ではないが、どうやら「明治神宮」の「明」の文字が割れた一部分のように見える。とすると、割れた相手の岩があるはずだ。その他の文字が刻まれた岩も転がっているはずだ。消え残っている雪と枯れ葉と苔をどけて、岩を動かしてみよう。まず、写真を撮ってから。斜めの角度でうまく撮れないな。もうちょっと岩を動かして……　私の力ではビクともしない。でも、もう一度。

そのとたん、雪を踏み抜いて後ろに倒れた。「痛っ！」いやというほど腰と背中を打った。一瞬息が止まった。さっきから私が踏んづけたり、腰を下ろしたりした岩は、あれもこれも十次郎が祈りを捧げて祀った「明治神宮」の岩にちがいない。無礼者の無礼な態度にお怒りになったのに相違ない。痛く感動し、一週間ほどは咳ばらいもつらかった。

探勝路まで戻るとき、二度ほど岩にかぶった雪を踏み抜いたが、けがは免れて帰宅した。出かける前に、天寧寺の十次郎の墓をお参りしておいたおかげではないかと……。

この本をまとめるにあたり、貴重な資料を拝借させていただいた、遠藤十次郎のご血縁の佐瀬栄様ご夫妻と、あれこれとご指導をいただき、すばらしいものに仕上げてくださった、おもはん社の冨田国衛様とハートプラザの高久俊秋様に感謝申し上げます。

令和三年四月

惣山太郎（加藤　紘一）

《参考資料》

「会津若松市史」
「北塩原村史」通史編
「北塩原風土記」（渡部新一　著）
「塩川町史」
「喜多方市史」
「福島県史」
「会津大事典」
「会津史談」第八十三号
「会津地名人名散歩」（宮崎十三八　著）
「会津戦争全史」（星　亮一　著）
「会津剣道誌」（会津剣道誌編集委員会）
「磐梯山　―黄金の山・湖・里―」（福島民報社）
「裏磐梯の植林と遠藤現夢」（阿部　武　著）
「実録磐梯山大爆裂百年史」（阿部真典・福島ＮＯＷ）
「磐梯山噴火百周年記念誌」（記念事業協議会）
「磐梯山破裂せり」（噴火百周年記念事業実行委員会）
「裏磐梯自然ハンドブック」（富田國男　著）
「遠藤現夢小伝」（遠藤義之助　著）
「蘇れ遠藤現夢さくらアカマツ物語」（葛岡八千代　著）
「百年前の報道カメラマン」（千世まゆ子　著）
「木村昌平の磐梯山噴火見聞略史」（遠藤　仁　著）

《その他、資料提供》

・佐瀬栄氏
・冨田国衛氏
・裏磐梯ビジターセンター

ー 先人に学ぼう ー
語り継ぎたい　ふるさとの話　第７集
史実と創作　セミドキュメンタリー
復　興　の　礎

令和３年７月１５日　初版第一刷発行
発行者　加 藤 紘 一
〒 965-0823
福島県会津若松市建福寺前 6-39
TEL 0242-28-3580
印刷・製本　おもはん社
頒価　１５００円（税込）